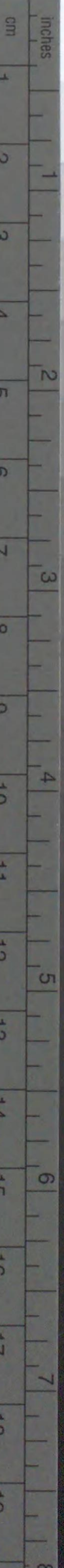


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

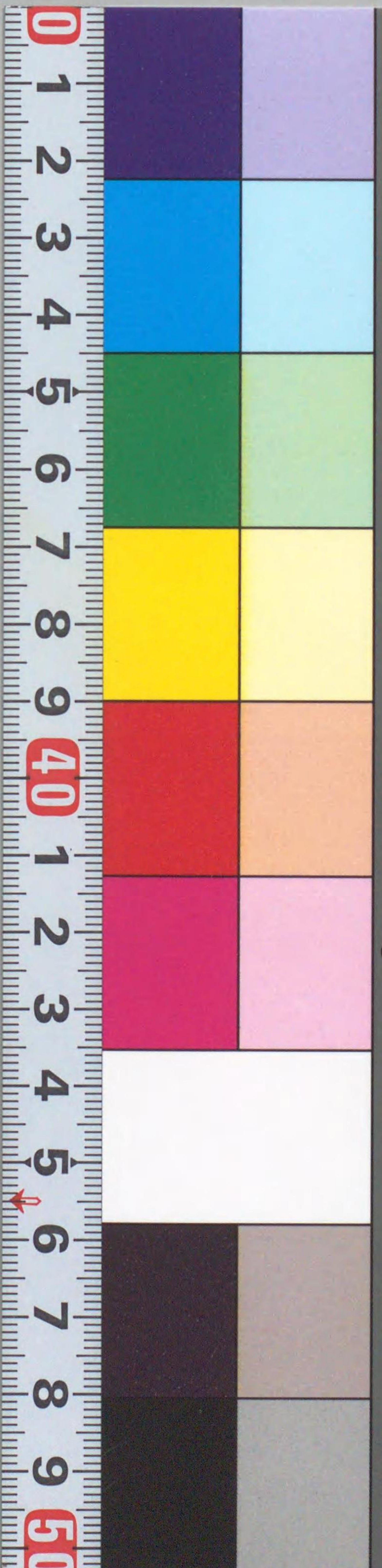
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

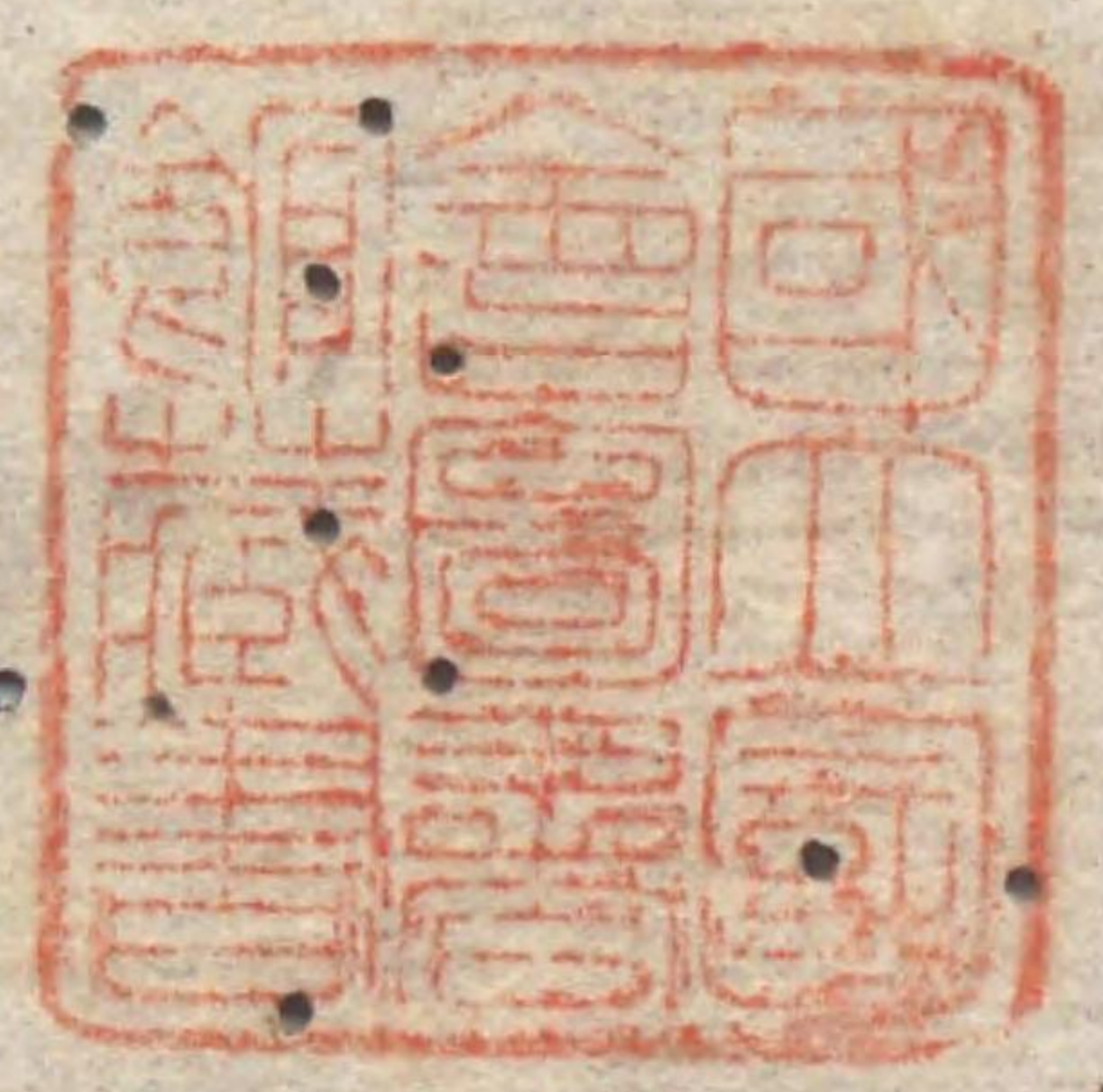
© Kodak, 2007 TM: Kodak



813.6
I 6199
Wm J

增補雅言集臨見
五十一

813.6
I 619
N 228



691367

増補雅言集覽卷之五十一

石川雅望集
中島廣足補

○之の部

志爲(伊勢物)三「思ひあらばむぐら此やどよねもーなんひおきものよのをぞをー
 つゝも(源帚木)七ものゑんとをいたくー侍りーりバ(同松風)四おひーくー内のこと
 とゝもーてん(同をとめ)卅いとこめりーうーめやうつくーきさまー給へり
 (同すま)四十竹あめる垣ーとたーて(同少女)五十卯花垣ねことさらーとさーて
 (同若菜)下六いりゝりー侍るべき(同)八ふみつくりるんふさぎあさやうのを
 さひとさぞもをーかど心をやりてー(伊勢物)八十惟喬のみこ例のかりーはおそ
 ーますとよよ云々(古)誹「かよをして身のいたづらよ老ぬらん年のおもそん
 ことぞやさーきもー(源帚木)十けよかうもーつべかりけりと云(同野分)三御こ
 ろまどひもーぬべくおぞーりー給へる(源湊標)五やがてよれまつりぞとをー給
 へべきあれど(同藤とあま)十おとゞのかくー給へる事といりゝりきこえりへすべ
 からん(同)卅おろりたー給ふとさなどいとさどくおとあびたるさまよものー給

へど(同蓬生)七今のよれ人のせめる經うちよみおこあひなどいふ事のそづかしく
したまひて(同あふひ)十御こゝちもうきたるやうよおせされてなやまうう給ふ
うちうて(源少女)十六志ぐれうちうて秋のうも風もさぐならぬ夕ぐれよ(同あふひ)
卅時雨うちうてをりあせれるくれつがた(同帯木)四さうりがきをりふのいら
へこゝろえてうちうなさをりひる分よろさもおおかりとみ給ふれど
てにを(後)別よみ人「そへてやる扇の風こゝろあらばおおもふ人の手をあ
はは(枕)七「つめとなほみな草こそつれなれあまたあればさくもまど
をなれを(枕)七「つめとなほみな草こそつれなれあまたあればさくもまど
れり(拾)順雜秋「ことねいなぞやりひなきたあまたのありぬこりれをひきよどめ
ねを(源柏木)三まことさまのあやまちなけれバ(同)卅「ときあればかそら
ぬいろよほひはかりかたへりれよやどの櫻(兼輔集)一「あたらさき年のそと
めのりいらまひふるさ人よあへをなりけり(古事記)君がよそひよふとくあり
けり(補伊勢大輔集)「かた戀のくるかりしもあぐさめて命あらばとおもひけ
るるか(拾)秋よみ人「もぢぢのいろをそへてかぐるればあさくもみえせ山川
のみづ(新拾)夏後西園寺入道前太政大臣「けふそやかへるさすゞ御被川ゆふなまけりけてあ
さやたつらん

補 **川** 過去(月清)上「うぐひすのこりりかえたこほらせバあらぬ露もや花よお
くらん(同)同「朽よけり森の落葉よちもきえてかそり色のまをかそりぬる(後)
兼下「いろふかくよひこと藤浪のたちもかへらで君とまれど(古)戀四よ
そ「くれあるれそつはかぞめのいろふりくおもひ心これわそれめや(後拾)春上
「よふともわれをそれめやさくらをさこけれたもとちりてかり(月清)三
「さあへとる田子のこゝろねらねどもをよぎ秋の風をまゐる、
補 **一** 往(月清)二「み一人の袖ようきよごたまのやがてむあさき身とやな
りかん(同)二「うぐひすのかさよ一日よりやまさとの雪まのくさもむるめさよけ
り(六帖)下「山ざとよみよ一日よりとふ人も今のあらしの風をさびさ(同)同
「とふ人も今のあらしの風をやくとすれさてよ一人よやのあらぬ(山家)下こと
その霜りれよよおもびよき露のかさけもかゝらまか(源)下廿。紫上
心とそむきよがたとたゆみなくおぞたれせ(新古)雜中「立出てつま木こり
よかた岡のふりき山ちと成よけるな(万代)雜三「跡たえて住うりれよ一つの
國のいくたよりかさ身をいりよせん(同)春下よみ「おもひれ花よたぐひて日を
へよ我ならざらん人よをらるか(續拾)神祇「かきよよ驚のたりねの花の色を

日吉のかけようついでぞ見る(新後撰)春上後京極「鶯のなきよ一日より山里の雪まの

草もそるめきよけり(同)同爲氏「里人の山澤水のうも氷とけよ一日よりこりなつみ

つ(同)春下新院御製「九重ははるいなれよさくら花かそらぬ色を見てのぶりな

(同)冬道玄「今朝のまたそらよや冬をいらすらん袖よふりよ一時雨あれども(後拾)

秋上赤「やきもぬごごとよこそかかしけれさるかへりよかりもかくなり

染衛門「谷風よかれどいひ思ふらんこゝろいそやくすよ物(同)雜二相摸

「つかさえてもかれさてよみちのくのをふちの駒をきのふ見りや(蜻蛉日記)

下「かけてよそそもたえよ一日かけ草何よよそへてけふむをぶらん(新千)慶賀長家

「そたちよ鶴の毛衣ほどもかく又この千世をきくぞうれしき(拾愚)下「うつり

よ心(同)のいろよみたれつひとりよののころもへよけり(月清)四「わをれかん

なりよまた下待とても出よあとい庭のよもぎふ(同)「横雲のきえよそらよ

おもふりかさととりそれよ月のひかりを(拾愚)上「不とよぎを思ひやいづるよの

びねをかきてたちよ卯花のやど(拾)戀二よみ「あひ見でもありよものをいつ

のまよからひて人のこひかるらむ(千載)戀四花山院「よそよての中々さても有よ

をうたて物思ふきのふけふ哉(赤染集)云京へりへるを見てとまりよ一人のおやつ

りなうおやつゆるよ(風雅)戀一よみ「かへりよ心(同)の色(同)のあさければあたよめけ

る花とこを見れ(新拾)雜中忠見「住吉のまつと不のりよ聞りバみちよほのよる

りへりけん(壬二)上「神代より時雨ふりよやまいろのくせのさき坂もみぢしよ

けり(貫之集)「ちるが上よちりもまがふる櫻花かくてぞこぞの春もくれよ(同)

「もみぢのなぐる時(同)のあらなみのさちよ名こそかむるべらかれ(同)「八重

むぐらおひよとよから衣さがためよりのうつ聲のそる(古)戀二千里「音よかきて

ひちよとりども春雨よぬれよ袖とといこたへん(忠見集)「春雨のふりそめよ

しろうつたへよ山をみどりよかさんとや見(後拾)雜三赤「あけきこ道(同)のつゆ

よもまさりけりかれよ里をこふる涙(輔親集)「ふるどよさきとめよしう

めがよも春よなりてぞよはひまよける(千載)戀四よみ「あふさりの名をわをれよ

し中なれどせきやられぬの涙なりけり(艶詞)入道大納言隆房「ふる袖をかみたよぬれて

くちよをいりよ立まふこが身(同)をるらん(長嘯子記)「けふぞとる細谷川のおとよ

のみきよわさりよきびの中山(續千)戀二言明「いひをめぬ不さのかりよ有よを

あづ心な死きのふけふ哉(同)戀三貞時「ちぎりよもなほたのまれきいつそりとおもひ

そめよ一人のならひよ(月清)四「ふりよける友とやこれをかむらん雪つもりよ

いこいのちら山(同)下「志をりせで入よ山のかひなききたえ都よかよふこゝろの

補 一しぐな (金葉) 行家 「秋をらでつまよふしぐなをりからこ

ゑの身よはしむやと(赤染集) 「とやこ出てけふこゝぬりよ成よけりとうりの國よ

いたりよしぐな(夫) 卅三 磯がくれまりちまけぬれこ舟のそやくうき世をそか

れよしぐな(二條大皇太后宮大貳集) 「ちまやふる神の志るしをみたらしのみつと

もいりて思ひよしぐな **見** 梅園日記云建久六年民部卿家歌合廿一番左 沙彌性

哥「さくら花ちりそめしまで見しほどよかぬりよ成ぬ志賀の山越○判詞云みるほ

どよとやいふべからむし字よてい少ことさかへるよや○慎言按よ作者のよめ

りよまよて見しといへるをよしと思へり其證の古今集よ 讀人「うつせみの世よ

も似たるりさくら花さくと見しまよりつ散よけり大江千里句題和歌よ晚歸多是看

花回「今のそやかへり花なましみちかりし花をよしまよ程ぞへよける詞花集關白

前太政大臣牡丹を「咲しよりちりそつるまで見し程よ花のもとよてまつりへよけ

り後拾遺集赤染衛門「やをらそでねなまし物をさよふけてかたふくまでの月を見

しりかななどのうたの見しとあるよて志るべし再按よ右の判詞のちりそむるまでと

やいふべからんし字よてい少しことたがへるよやとありけんを後のひがうつし
よのあらぬり上の詞花集の御哥よちりそてしまでどのなくてちりそつるまでとよ
み給へるを考ふべし

○ **補** 一よける (玉葉) 夏よみ人 「ほとよぎを雲井のこゑをまく人の心もそらよ成

ぞしよける(同) 秋下 順徳院 「秋をたよいつりとおもひしあらを田のかりすほよあ

りぞしよける

補 一 (万) 十一 「わたつみのとよむたぐもよ入日さしこよひの月夜あはら

けくこそ(同) 十七ノ 四十四 「うらこひしこがせのきみのかでしこがなよもがもなあさか

さなみむ(同) 十九 十八 たよべよいつを死をなさせうらかあしそるのをぐれば(同) 四十

「そるの野よかみたかびさうらかあしこのゆふかけようぐひをかくも(古) 平旅

「かりくらししたかむたづめよやどからん天比がそらよわれの來よけり(赤染集)

「まちくらしさつ死のほよ過よけり花たちをさひいりよありよ(万) 十七 卅七 うち

ぐそしふせの水うみよあまおねよまがぢかいぬき(和泉式部續集) 下 「春霞けしき

立しあしたよりまたうぐひをのむつねかりせば(万) 十四 十二 「うみつけぬまぐそし

まどよ朝日さしまぎらさしよあありつゝ見れば(同) 十七 十七 朝日さしそがひよみゆ

る(新古)冬公衛「狩くらしかたの、まゝを折きてよその川瀬の月をみるりな○新
釋よかりくらしかたのちをかけていふ詞にてわざと狩くらしてと云意也師の古今
集遠鏡よいそれるも古意の説よおとくひぐこと也といへれと新古の歌をもて
みれば古意の説も遠鏡のもひぐことよあらせ(万)十九、長哥云々、わけまくもゆ、
しかりこき云々

○一、(空穂彌開)十一、春宮よ花の宴きこしめし、よも参り給そぬ事をなんの給

ふめりし(源帚木)四十きのふ待くらし、を(同あふひ)六、としころ志のびおせし、

りと(宇治拾)九おのれの故うへのおもしまし、折みづし所仕候ひしもの、女は候

(源幻)十とさまりうさまよおもひめぐらし、よ(同竹川)二いそぎおせし、御みや

づりへもおこたりぬ(枕)十一これのしきのみさうしよおそしまし、時のことなり

(源すま)七故院のたよおそしまし、さまかぐら(同楨柱)廿まの人もいひなし、た

よ猶さやのあるべき(同冊)廿きこしめし、よもこよあさちりまさりを(同盤)廿りの

大のもろともよあそびてまぐし、年月のまづおもひ出らるれば(仲文集)卅一、今

とてりへし、よりの藤衣きたりときくひいとぞかあしき(六帖)上「名よおへ

いづれもかなし朝なくかで、おせし、うなるこがもら(万)九ノ、十八。浦嶋子あひか

たらひことかし、りバ

補一己。汝(落窪)一あなこりし、のひるねやあが身の不どしらぬこそいと心

うけれとてうちあざとらひ給ふ

一師(枕)五さるべきことなどとせ給ふ御文の師よてさふらふ(空穂俊蔭)一、學

士をりへて琴の師をつりうまつれ春宮さとりある御子かりもの、師せん人のかん

いたせべき御子よあらせ(源帚木)廿そのものを師としてかん(同紅梅)五とりあき

御あそびとさをもこなたを師のやうよおもひ聞えてぞたれもならひあそび給ひけ

る(和名)古本 徐廣雜説云人有三尊非父不生非師不學非君不仕故曰三尊也(源少女)

三ひとへよこし、ろよいれて師も弟子もいとよそけみまし給ふ(同東や)五琴琵琶の

師とて云々師をたちるをがみて、下師とをりし夕ぐれなどよ彈あそせてあそぶ

時(云々同少女)十さえふりき師よあづけ聞え給ふてぞ學問せさせ奉り給うける

(源夕かほ)四十御ふみの師よてもの、師(源胡蝶)九もの、師どもよの白きひとか

さねこしざしかどつぎし、またまふ(同橋姫)八うたづりさのもの、師どもかそや

うのすぐれたるをめしよせつ、(同繪合)二かよのさえも心よりそなちてまをふべ

きとさならねど道々よもの、師あり(同若菜)下ノみちし、のもの、師上手いとま

あき比なり(同)十四おやつりなからぬもの、師あり(法)の師(源夢浮橋)十一「法
の師とたづぬるみちをしるべよておもそぬ山よふまよふりか(催馬樂)老鼠法師
よ申さん師よまうせ法師よ申さん師よまうせ(源帚木)十七のりれ師の世のこととり
とき聞せん所のこ、ちせるも

詩(源帚木)廿まづりたれ詩の心をおもひめぐら(枕)四又あまたのこゑよて詩
をせ

時(源夕霧)九こよひこのたたりよとまりて初夜のトせてんぞとよりのるさるり
たよものせん(枕)十二、あそしさふらふべきをトれぞとよもなり侍ぬべければとま
りり申ていづるを

辭(枕)十一。生昌今まづりよ御局よまゐらんと辭していぬれば(空穂 菊の宴)下
卅春宮の大夫よもの、給ふを辭し給ふ表つくらせ給ふとてめして(同 吹上)下ノあ
さましうされの守れ辭したりける國よまうぞ来て(同 梅の花笠)十御前よてけうあ
る節會あどよおん手づからあらべてたまふをたよ辭し奏してつかうまつらぬを
(榮玉の刺菊)卅大殿左大臣をトせさせ給ひければ(源わかき)上、六其ころの右大將
やまひいてト、給ひけるを

補 いたして (枕)十二、里よて北おもてよりあ出してのいりせせん
源帚木)五おのづからひとつ故づけてし出ることもあり(同 ありし)六

衣ガへの御さうぞく御帳のかたびらあどよ、あるさまよ、いづよろづよつりうま
つりいとむをいとほしうせむろなりとおせせ

いでたるさざ(源帚木)八、むろなく、いでたることさざもゆゑあからせみえたら
んりたうどよていり、おもひのり、をり、からざらんすぐれてきせをさきりた
のえらびよごをおよばざらめ(同 螢)廿一いてたるさざいひ出たることの中よけよ
とみえきこゆることなさいとみおとりするさざなり

代(拾)物名なか、うぐひすのかりむろよ、我をなく花のよほひやあそいと
まると

忘ろいもの(枕)九、からぎぬよ、ろいものうつりてまたらよからんり、(榮 初花)五
四らてん、たる櫛どもをいれて、ろいものなどさへいさまよ、いれあして(同)もとの

車(四)ろよ、いべよ、ろいものをつけたら、やうかり(同)つほみの花(三)おやいある
ひわりを、して忘ろいものたれものあどをいれて出、給へりける(増鏡)三十二月
一日、石清水のや、ろよ、行幸あり、云々、別當通成、いみ、うさらめかれたり、云々、ろ

志をなつ(源 東や)卅屏風の袋にいれこめたる所々よせりけ何りあらゝりあるさ
まよゝたあちたり

志をなく(六帖)六「みやまよの雲をたかびきあはまけり川のせせとよちどりしを
なく(堀太)隆源「夜やさむき友やこひいさねて死げばさる此かもちちとりしを

なく(万代)夏長能「橘の花はさけりり成り山ほとゝぎを死かけしをなけ(万)
十七かほどりれまかくしをあく春は野(同)十九四「みそのふれ竹のそやし(万)
廿九ぐひそひ之波奈吉爾之乎雪のふりつゝ

志をらく(神紀)下卅須臾(遊仙窟)五造次無可比方(注)倉卒貌(同)須臾之間(万)二
十「よりの川ゆくせをそやみ志をらくもたゆることなくありこせぬりも

志をる(芝居)夫(九野宮)左大臣「志をるする山松りけの夕すゞみ秋おもゆるひぐらゝの
聲

志をのいり(柴ノ庵)源若紫「おなと志をれいりなれとせこしをゞいさ水のな
がれも御らんせさせんと

志をのと(あみと)万代(雑三)「人と志を志をれあそとをおあけていつりみやこ
の秋をこさへん

志をのと(玉葉)雜一肥後「山里れし志のとぞその雪とちて年のあくるもいらせ
やあらん

志のと(輔親集)「うめがゝのたまらぎよふことのみぞしをれとびらの
とりどころなる(同)「心をぞしをれとびらよとゞめつる梅のよほひのなべてなら
ねバ

志のふね(赤染集)四山里よゆきたりしよおくりの人々かへりて二三日おとせざり
しりバ心ぞそうおせえて「おくりおきて人もみえねばいしへの志をのふねとも
おもゆるりか

志の志た道(風雅)雜中「山人の分入るれあともなし峯よりおくの柴れした
みち

志をぐり(栗)拾玉「志を栗の色づく秋の山風は梢をさらぬ木のも猿りか

志をぐる(夫)廿顯季「峯よりきこしを山よいる人の柴車よてかへるなりけり

志をくさ(新古)春上秀能「花ぞみる道のしやくさふみこけてよしの宮の春のあけぞ
の(新後撰)秋上後鳥羽院「たまぞこのみちれ芝草うちあびさふる死みやこし秋りせ
ぞふく(新後拾)雜春為秀「死すすあくいとたのそみれ咲しより小野のしを草わけぬ日

志をく(新後撰)秋上後鳥羽院「たまぞこのみちれ芝草うちあびさふる死みやこし秋りせ
ぞふく(新後拾)雜春為秀「死すすあくいとたのそみれ咲しより小野のしを草わけぬ日

志をく(新後撰)秋上後鳥羽院「たまぞこのみちれ芝草うちあびさふる死みやこし秋りせ
ぞふく(新後拾)雜春為秀「死すすあくいとたのそみれ咲しより小野のしを草わけぬ日

志をく(新後撰)秋上後鳥羽院「たまぞこのみちれ芝草うちあびさふる死みやこし秋りせ
ぞふく(新後拾)雜春為秀「死すすあくいとたのそみれ咲しより小野のしを草わけぬ日

いな

補 志をや 柴屋 (壬二) 中 「くれりゝる嶺のしをやの夕しもたれしら雲の衣うつらん (同) 同」 旅をろも霜さる月のさむれよ道のべをを宿をさしりせ

補 志をやま 柴山 (後拾) 冬 國房 「いりをりりふる雪なればかぐどりるをれしをやまみちまどふらん

志をふ 芝生 (堀太) 董 (千載) 春下 國信 「こよひねてつみてかへらんをみれさく小野のしをふの露しけくとも (玉葉) 春上 定家 「末どをき若葉れしをふうちかびきひをりなく野の春れゆふぐれ **補** (風雅) 春中 後二條院 「雲雀あがる山れすその夕ぐれまをりをれしをふもる風をふく (同) 春下 親子 「をみれさく道の志をふま花ちりてをちりたかむのべれゆふぐれ (同) 同 後伏見院 「何とかくみるよも春ぞいたむしき志をふままどる花のいろく (同) 冬 實 明女 「空高くすみとほる月のかけさえて芝生まろき霜のあけがさ (同) 同 泉院 「あどたえてうづまぬしもをさまどれしをふがうへの野べれうす雪

志をふるひびと (源 柳) 三 見たてまつりおくとてこれもりのもよあやしき志をふるひ人ともあつまりて (河海) 柴振人木葉ナドカキ集ルイヤシキ賤ノ男也一説黻古人年老テシロヨリタル人ナリ (源 ありし) 十 六 かよともさゝわくまどきこのもりの

ものしをふるひとむもをぐろのくして瀆風をひきありく○眞淵云明石ノ卷ノモ山カタツキタル海コ、ハモトミリ山ベナレバ共ニ柴刈テモイヅル人多カリナンサラハフルハカルノ誤ニテ柴カル人ニヤ猶可考 (頼政家集) 「我よおどる人こそなけれ山里よかつを引をるしをふるひ人○雅望按よ万葉貧窮問答ニ之波夫可比ト有テシハブキタイヘレバコトモシハブカヒ人ニテ老人タイヘルナルベシコ、モ明石ノ卷モ共ニコノモカノモイヘル詞アレバ老人ノコ、カシコニ居テシハブキシワタスサマナルベキ歟 (貧窮問答) 糟湯酒うちをゝろひて之呵夫可比ト今本ニアルハ誤ナリ之波夫可比ニテ咳嗽を云 **補** 長基公さりきさの日記まもあり

補 志をぶれ (万) 十七ノ、云々かへりきて志をぶれつくれ云々
志のぶく (狭) 上 十六 下 京はの音もなりゆつる子規もいぐれのさたりよの聲をれまけり云々只こゝもとよねたるこゑして打しのおく **補** (源 のわき) 九 うちしをぶきたまへれバ

志をぶき (和名) 三 咳嗽病源論云欬嗽 咳走ニ音欬字亦 肺寒則成也 (源 若紫) 四十九いふつまををらしてしのおけバ (同) 手習 冊 四 いでどののりのくぞあづまどりてといふよも志をぶきいたえせ (同) 神 四 こゝかゝと打しをぶれて (同) 朝 かは 三 またいと

志なれぬもあさまし **志かぬ** (大和物) 五今までいかにぬこと、おもひて **志あま** (万)
一ノ「たびよしてものこひぎのなくことおきこえざりせばこひて志なま

志よいる (源みのり) 十。タキリノ志よいる魂のやがて此御からよとまらなんとお
もほゆるもこりなき事かりや **志** (宇治拾) 三、と一さううかりたる人の志よ入て 云々
目をかみよ見つけてよいりてねたり

志よつる (狭) 二、上大宮の見給せんこと、おが志よいと、よよつるこ、ちせさ
せ給へバ

志よげ 死顔 (土佐日記) 下ある人哥「わすれ貝ひろひもせト白玉をこふるをた
よもか、よみとおもせん 云々 玉ならせもありけんをと人いせんやされども志よこ

顔よりりきといふやうもあり (抄) 大論臨終之時色黒者墮地獄赤白端正者行天上
志よかたね (父子相迎) 上たゞのそらよゆきて志よかたねのふせるを見よ (智論) 一

切死屍中人身最不淨
志よりへり (源 夕かほ) 四十志よりへりおもふこゝろの志り給へりやといひつりそ
す (うつろ 樓の上) 上ノ上 四十七 「志よかへり思ひそめよ一世中此ありぬことこそ哀なり

けれ (源 繪合) 三 あささりなるこり人ともい志よりへりゆりうがれど (万) 四、三 (拾)
十二

戀するよ拾

戀五 「おもひよ志よせるものよあらませばちたびぞこれい志よりへらま (源
人丸

おもめの浮橋) 六 おやのよかへるをばさしお死てもてあつうひなけきてかん侍り
(落くる) 二 ましてその死くわき人の志よかへりこらふ (狭) 二、上 「志よかへりま

つよ命ぞさえぬべきなり、何よたのめそめけん **志** (狭) 三、下 わりき人々のよか
へりめでたしとおもひさることこりなり

志よせる 死 (狭) 二、下 誠よもの思ひよ志よせるものとい此御ありさまよてぞ見侍り
ぬる **志** (同) 四 う死をばいらぬさまよてもちよよせぬ身をながらへんなど云 (竹

取) 上 志よるをるしよをせりめりかどてかちどりかく
志 (散木) 戀 上 「水の海とおつる涙のなりよけりあふべきしよもな死ときくよ

り (月詣) 賀 昭 「かゝそちよみちぬる年を待つて千年つむべ死ふかよそひせり○
志のし時節をいへるよてそれをしよよせたり田をかる時節をかりしは月の出る

時を出しよといふも皆同トされバ此歌も異本よ志たがふべ **志** (伊勢集) 三 「か
みよのとひたれる松のふりみどりいくしよとりい志るべかるらん

志不どけ 俗ッ、クリ (榮 楚王の夢) 廿 一 さるべ死かんためみなまゐりことたまひて
云々 夜より雨こまやりよふりて出その人々志ほどけたらんいさる物よて殿をそト

め奉りていりでりあゆませ給せんむらんと世中のみのりさなど數をつくりささぐ

(狹)二上よもそがらさきあり給ひける御どのけしさいとを不ぞけけよてひきり

つがせ給ひける(夫)卅六「とふればけりきみぞは落ふれてぬれはどけぬい

と不ののみや(源あか)四十「よる浪またちかさねたる旅衣を不どけしとや人の

いとそん(榮月の宴)廿五月のさみされも哀よてを不どけくらしとこのたもとよ

おとらぬ有さまよて云々(千載)夏仲正「五月雨のとまれづくは袖ぬれてあかす

どけ此波のうたねや(相摸集)夏「さかへひきもをよとるといふ田子もどがど

袖のしとどからとま(彌散木)「年ふればれがきとぞはおちおれてぬれしとどけ

ぬいと不の身や(榮とりへの)廿御を不の袖もしとどけよていでいりあつりひ

きこえさせ給ふ

志不ぢ 盤路(千載)春上攝政「霞く春のしをちを見こさせみどりをこくる沖つ

しらなみ

志不ぢ 新發意(源若紫)五かの國のさだのりみ志不ぢは娘のかいづれたるいへいと

いたしり(小大君集)十これ仲の朝臣病は煩ひてみりそのしをちをよび云(岷

江入楚)或云御堂關白出家以後世皆稱入道殿其時憚ナシテ世間ニ入道ト云ナ

シ満仲モ自新發意ト号云々

志不る 絞(落く不)一。雨の文少將ノ入おとしさるさましをるさりなりかちより

おもしろたるをめりとおもふ云々(伊勢物)七十「なみたよぞぬれつしをる世は

人のつら死心のそでのしづく(後拾)戀四「ちぎりさかたみし袖をしをりつ

末れまつ山浪とさすと(延喜式)七内匠寮十絞漆帛二尺(古)戀二「偽の涙なりせ

べから衣志比び袖しをらさらま(續後撰)雜中「松山のこかたかなたは浪こ

えてしをるさりもぬる、袖りを(新古)哀傷具「そみぞめの袖をしをらよもかさか

くしをりもあへむ露ぞこをる、(補)玉葉冬延政門院「今朝のまの雪の跡なく消

えて、枯の、朽葉あめしほるなり(風雅)春下「雨しほるやよひの山の木がく

れよのこるともなき花のいろりか(廣足按此二首)源みのり)五 大將の君も泪よくれ

ためもええ給ぬをしをりてしほりあけて見奉るよ

志不をおふ(十訓抄)十七云々 楚山よえたりし璞玉も良工よえられざりしと石

よことちから吳坂を過る麒麟も云々よあそざりなる間しををこそおひけれい

りある秘曲なりとも實よきしをらざらんためよしよきことよて

補 志不こた(山家)下「あそぢしませとのかころいさくとも此しをたよおし

とらむや

下りり(今昔) 鮭さひはうらかどをつゝゝるほどよ

忘ほりせ(沙風) (新古) (戀二) 式子 「忘るべせよあとかき浪よこぐ舟のゆくへも忘らぬ

やへのゝ不風

忘不たれ(拾) (戀) (賴基集) 卅 「忘不たる、身のこれとのみおもへどもよそをるたづ

もねをぞかくある(重之集) 五 「水海の粟津よやどる君ゆゑは花かく忘ほをされて

けるりか(公忠集) 廿 「水うみよ忘ほざるをかりをさなくて都よとこれおいまける

りな(躬恒集) 十 「あが濱よゐてゝ不たる、郭公さ月さりりのあまよざりれる(齋

宮式) 息詞泣稱塩垂(源) (桐壺) 十 御忘不たれがちよのみおそゝますとかたりて(空

穂藏開) 一 「と面白くかかゝけれは聞いめす御門も御忘不たれ給ふ(拾) (戀) あまの

ゝ不たれ侍りけるを見て(惠) 「故郷をこふるたもともかこりぬよまたゝ不たる、あ

まも有けり(源) (すま) 廿 「ゝ不たる、ことをやくよて松島よ年ふるあまもかけれを

ぞつむ(同) 夕顔 五 うちゝ不たれけり(同) (さあき) 十一 とあわれまてうちゝはたれさ

せ給ひぬ(拾) (戀) (賴基) 仁和の御屏風よあまれゝ不たる、所よ鶴あく(大鏡) 八 七才よて

舞せさせ給へる計のことこそ侍らざりゝ萬人ゝ不たれぬ人侍らざりき(補) (千載)

夏成 「五月雨はたくものけふり打しめり忘不たれまさるをまのうらびと(同) (仲) 正

「さみたれいとまのゝづくよ袖ぬれてあかゝはざれの波のうきねや(同) (戀二) 「ゝ

不たる、伊勢をのあまや我からんさらばみるめをかるよしもがを(同) (同) 賢 「ゝほ

たる、袖のひるまの有やともあそでれうらのあまよととゞや(金葉) (戀下) 「人ゝれ

ぬこひをしとまの浦人のあさゝはたれて過をかりけり(拾) (哀) 「あまといへどいり

なるあまの身なれさりよよ、ぬゝほをたれわたるらん(新後撰) (戀二) 「をまれあま

のゝはたれ衣浪かけてよるこそ袖もぬれまさりけれ(大和物) 四 だよむときよ帝の

のゝりあそれがりた、まうて御ゝはたれ給ふ

忘ほかへ(蜻蛉日記) 中 下 いみどろもうちどけたりつるうながとおもひてなりをうち

みればいたうゝはなへたり鏡をうちみればいとよくけよのありまたこたびうらと

そてぬらんとおもふこと限な

忘不かれ(源) (空蟬) 二 いせを此あまのゝ不なれてやどおもふもたゞからせ(後) (戀) 三

伊 一 せゞりやまいせをのあまのきて衣ゝ不なれたりと人やみるらん(源) (蓬生) 十 五 か

たみよそへ給ふべきみなれ衣もゝ不なれたれば(補) (新續古) (春上) 一 せでりあれやか

をみの袖よゝ不なれてかへるいせを此あまつりがね

一（万）十八（植）田も蒔（た）けもあさこど（一）がみ枯ゆくをみれば心を
いたみ（枕）十三（作）リ花御前の櫻色（の）まさらで日な（ま）あたりて（一）がみわるう
なるたよこび（一）きよ

補一（新後撰）夏信「五月雨（の）ゆふ（一）がむりふみかと川せりれていとゞ
水まさりつゝ、

おぞう（う）つほ（國讓）下我をのこ（ト）ぞう（一）あらぬものぞをべてめをおも（と）ぬり
云々（源 螢）十（ま）ろがやう（ト）ぞうなる（れ）もの、物語（の）ありや（源 植柱）廿（ヒ）ゲツ

おぞうなる人のゆるぎ所あるま（ト）たをとてとりよせもてか（一）づき（源 常夏）五（源）の
中將のいと（ト）ぞうの人よて

おすのぞりて（源 あり）六風いみ（ト）吹汐た（う）みちてかみのおとあ（ら）きことい
おすも山ものころま（ト）たは（し）きなり云々此風い（ま）さ（一）やまざら（ま）く（バ）潮のぞ
りてのころ所なり（ら）ま（一）云々

おす（此）や（不）あ（ひ）源明石七「うみ（ま）ます神の（さ）をけ（ま）か（ら）き（バ）汐のや（不）あ（ひ）
さ（ま）らへ（ま）ま（一）

おす（源 松風）十（哀）ま（さ）る（一）が（不）や（の）かた（ま）ら（ま）す（と）く（一）つらんことをお（ぞ）う（の）給ふ
さ（ま）らへ（ま）ま（一）

おす（や）き（衣）源あ（さ）の（は）十（お）す（や）き（衣）此あまりめ（か）れみ（ど）てなくお（ぞ）さ（る）、（ま）や
とて（六帖）下「お（り）此海人の（し）や（き）を（ろ）もなれゆ（け）バ（こ）ひてふもの（の）は（こ）すれか

ね（つ）も（古）戀五（讀）人「す（ま）のあ（ま）此（し）や（き）衣を（さ）を（あ）ら（ま）さ（ま）ど（不）あ（れ）や（君）が
き（ま）さ（ぬ）**補**一（万）十一「お（り）のあ（ま）此（し）や（き）衣なれぬれ（と）戀（と）ふもの（の）は（こ）を（れ）り
ね（つ）も

補お（す）ま（赤染集）「この浦此（し）や（ま）あ（そ）お（む）ら千鳥ふり（を）さ（む）らんあ（と）な
を（し）み（そ）

補お（す）け（万）九（二）「（し）や（け）さ（つ）あり（を）よ（い）あれどゆく水（の）を（ぎ）よ（一）妹が（か）さ（み）
とぞ（こ）一

補お（す）け（ふ）り（拾愚）上「浦風（を）やく（し）や（け）ふり吹（ま）よ（ひ）た（か）びく山（此）冬（ぞ）さ（び）
し（き）（新後）戀二（定）家「す（ま）此（う）らのあ（ま）り（よ）もゆるお（も）ひ（り）を（焼）し（や）け（ふ）り人（の）な（び）
り（で）

お（す）ぶ（ね）（万）廿（七）お（す）ぶ（ね）ま（ま）ち（お）ぬ（き）こ（の）か（へ）り（こ）ん（〇）汐（さ）死（を）こ（ぐ）ふ（ね）
なり（と）い（へ）り（同）廿（一）「お（す）ぶ（ね）の（へ）こ（そ）ら（を）み（ま）そ（く）も（お）ふ（せ）た（ま）り（り）
お（も）ち（へ）か（く）よ

お（す）ぶ（ね）（万）廿（七）お（す）ぶ（ね）ま（ま）ち（お）ぬ（き）こ（の）か（へ）り（こ）ん（〇）汐（さ）死（を）こ（ぐ）ふ（ね）
なり（と）い（へ）り（同）廿（一）「お（す）ぶ（ね）の（へ）こ（そ）ら（を）み（ま）そ（く）も（お）ふ（せ）た（ま）り（り）
お（も）ち（へ）か（く）よ

お（す）ぶ（ね）（万）廿（七）お（す）ぶ（ね）ま（ま）ち（お）ぬ（き）こ（の）か（へ）り（こ）ん（〇）汐（さ）死（を）こ（ぐ）ふ（ね）
なり（と）い（へ）り（同）廿（一）「お（す）ぶ（ね）の（へ）こ（そ）ら（を）み（ま）そ（く）も（お）ふ（せ）た（ま）り（り）
お（も）ち（へ）か（く）よ

補 志不ふむきね (山家) 下 「浪よつきていそよいまをあら神のし不ふむきねをまつよやあるらん

補 一不こえて (新續古) 雜中 基親 「なよそがた入江のあし不こえて松のこをびくうらかせぞふく

補 志不こいのひ (散木) 一をたれるまやのあれよりふる雪やみし志不こいのひよもふるらん (顯注) 越前國は潮越といふ所あり樋を懸て潮をくこすゆゑは潮越といふかり

一不あひ (古) 雜上よみ 八しらす 「こたつうみのおれつし不あひよりおあひのきえぬものからよるりたもなし 補 (後拾) 羈旅 通俊 「あなふくせとの志不あひは舟出してそやくぞをぐるさやがたやまを

一不さる 潮ガカク浪ノ (万) 廿一 「一不さるよいらこのしまべこぐふねよいのるらんりあらきしまを (同) 三 志不さるれかみをうしこみ 補 (万) 十一 卅六 「うしまどの浪のし不さる島とよみよせてし君よあまぢりもあらん (同) 十五 卅八 「潮干なをまたも我こむいさゆりむおきつし不さるたりく立きぬ (續古) 羈旅 家持 「ふなでするおきつし不さる白妙のかしをれわたり浪たりくみゆ

補 一不さる (万代) 雜一 基氏 「風をたる浦のまなどの汐さきま浪のりこえてかもめなくかり (落くろ) 一いでこのし不さきをりりておさくとりを

補 志不木 (新千) 戀一 公敏 「いりよせんあこぎり浦は袖ぬれてつむやし不木此から死思ひを (新後拾) 雜秋崇 金法師 「おすれぢよ旅をかさねてし不木つむあこぎりうらよなれし月りけ

補 志不ゆ (後拾) 羈 ありしといふ所し不ゆあみよまうりて云々 (金葉) 雜上 不ゆあまよ西れうみのりたへまかりりけるよ云々 (万代) 雜四 一不ゆあみよなよはのかたよまうりりて侍けるよ

補 志不みち (万) 卅三 卅三 「不りえより朝し不みちよよるこづみりひよありせばつとよせましを (伊勢物) 七十 五段 「いとまよりおふるみるめしつねならばし不ひし不みちかひもありかん

一不 (源あらし) 卅四 卅四 「ちりひしことおどかれて何事よつけても 「志不しとまづぞありるしかりそめのみるめいあまれをさひなれども (万) 廿四 「あしが死のくまどよたちておぎもこが袖も志保々よお死しぞおもてゆ (源みゆき) 十 九ありぢかなしくとゞめがたく志不しとな死給ふ 補 (山家) 下 「ひとりきておが身よまどふの

ら衣し不く、どこそなれぬらさるれ

志不トリ(伊勢物)九。富士山ノリチかりの志不トリ此やるまなんありける。この外所見

なすつまびらりからねバ文なまかくべきことをあらは補(玉勝間)五、説アリ可考

志不トミ(源)六うす雲かゝるをまひし不トまざらましりバめづらりよおやえま

しとの給ふ(同)あかし四十「よをうまこ、らし不トむ身とかりておやこの岸

をえこそまなれね(同)すま廿し不トみぬるよまひの人たまありましてなれむつび

きこえ父母よかりつゝあつりひ聞えおやしてからそ給へれ(同)タ廿か廿世

中のだあることもし不トみぬる人こそものゝをりふしこのもしけれ(瀧松)一此

道し不トみて(同)三此方し不トみたる人いりよもこゝろやすけあり

志不ひ沙干枕七むとくなる物、沙干の瀧ま大きかるふね補(月清)一「むしあけ

のせとれし不ひの明がたし浪の月かけとほさかるあり(新續古)八上よみ「おきつ

かせ更ていといと、月りけもさむきし不ひま千鳥なく也(万代)戀一相摸「いりよせんし

不ひの磯の瀧ちどりふみゆく跡此かくれおき身を(万)十二「ちぬの海し不ひの

小松ねもころまこひやとたらん人のこゆるま(同)十八おこのうみよしほのそやひ

バあさりし(同)廿一「おうのうみの志不ひのうたれかたもひよおもひやゆるむ

みちのかが手を(同)十六「ありしが潮干の道をあまよりの志たえましけむ家近

づり(同)廿八潮干の瀧またづおれとたる(同)九ゆられさきしほひしけら(同)

十なまそがたし不ひいいで、

志不ひがた沙干瀧(夫)八家隆「いせの海の入江れくさし沙干がたあまも不さるの玉

ひひろもと補(山家)上「やせわたるみかとの風し月更て沙ひるかたし千鳥なくお

り(新後)戀六「我ながらつらくなるみのし不ひがたうらまし末ぞとやざりぬる

り(續古)春上順徳院「なまそ江の志不ひれりたやかすむらんあまよとやきあまれいさ

り火

補志不ひし不みち(万)十七「あらつの海し不ひ志不みち時のあれといづれの時

りわが戀ざらん

補志不せ(千載)雜上俊忠「いかりおろす方こそおけれ伊勢の海の志不せよかゝる蟹

此釣ぶね(玉葉)秋下關白前太政大臣「雲もる、磯山あらしおとふけておきつし不せし月ぞ

りたふく(新拾)秋下後鳥羽院「秋風やし不せの波し立ぬらんあし葉をよぐゆふぐれ

の空(同)戀二寂蓮「伊勢のうまれし不せよあびく瀧をぎのそとあきふしよ何しをるら

ん(新續古)雜中稱名院入道内大臣「入日さを沙瀨のなみの末されてひりたし近き浦のそつし

ま(續千)秋下「伊勢のうみやまほせむるりよ雲されて月よぞかゝる秋のうらみ

(玉葉)旅 忠成「なるミグとませ此かみよいそぐら浦のまぢよかゝる旅人

志(源野分)七花の限りこそあれをけさるるまべなども打まどるり(後拾)

雜四「花のべ紅葉れまたをかきつめて木れもとよりやちらんとせらん

志へたぐる(保元)廿七ノ入民ナシヘタグル由テ訟ヘ申ケレバ(つれく)百廿人をく

るしめものを志へたぐる事(注)虐ノ字ナシヘタグルトヨメリ(續紀)五ノ獄訟無冤

(文粹)二、檻園之中恐有冤者

志(盛衰)六ノ尻頭ともかきをさかき君たちのいとはしくあしきをふりせて

志(小便)著聞(廿八)ある夜法師志とのしかりければ云々志をもねうしてさめ

らひるたり志をいさつまバ一定もろともよ出ぬべく云身をふるふぞよへも

とも一度よいでよけり云々志とさんトよせちらされよけり(紫日記)あるとき

のこりかきとざしかけ給へるを此宮の御志とよぬる、はうれしきとさかか此ぬれ

さるあふるこそおもふやうなることちせれ(榮初花)四御志とよぬれてもうれ

しけよぞおやされたる(うつ布藏開)上、五生れ給ひしをそちより御ふところとな

ち奉り給ませ御志とよをちおそしま(同)上、五あまた人よみせトとあんおも

ふとの給ふほどよ父君よとふさよかけつ(散木)うちわさりよよふけてある

だけるよかちよといそれける人のうちとけて志とよけるを聞て志おぶきを

たりければちていりよけり又の日つらけり「かたちこそ人よすぐれめ何と

なく志とよる事をうかりけり

志(夫)二、俊頼「けふくれば志とろよみゆる山がつのおどろのかみもあふひりけ

さり(長明集)「つのくはれこやのあてぞとろなるなよとさしたるあまのをさ

みよ(千載)秋上道經「ふみしたき朝ゆく鹿やすぎぬらん志とろよみゆるのぢれかるり

や(後拾)戀一、良暹「あさねがとみたれて戀ぞとろなるあふよもがおもとゆひませ

ん(夫)二、三條入道「常よりもめづらさきりなくひすのまたととろなる明平の

こゑ(月詣)戀上、性寂法師「志とろなる筆れをさびを見るからよ心のうちのかきとたるり

か(新拾)雜上、定家(拾愚)下、五月「玉水の軒も志とろのあやめぐささみたれながら明る

いくよぞ(玉葉)夏、後鳥羽院「あやめふくかやがのれまよ風すぎてとろよおつるむ

らさめの露

志とろもどろ(空穂藏開)上、一みな人でいのことゑひて云々 中納言志とろもどろよ

ゑひて(六帖)^六上「まめおれどよき名もたゞせかるりやのいざみたれなんあどろも
どろよ(堀口)^七基俊「うかる子草かる岡のかるりやの下をれよなりどろもどろ
よ(狭)^四下哥云々「御料なるいべちなるつゝみ紙よ書つけさせ給ひても院なども
こそ御覽つくれとおせしへせどどろもどろよやおせしなりぬらんひきもか
へさせ給とせなりぬ(同)^一上。大將哥「わげ心あどろもどろよなりよけりそでよ
り外よあみどもるまで(源梅かえ)^六みたれたるさうのうたを筆よまりせてみたれ
り泥給へるさあ見所かぎりなりあどろもどろよあいざやうつきみまよしければ
あど(落窪)「少將詞いといたくあまぐさちそとてあど、うち給へばさされおり
させ給へとて(同)涙よりも汗よあど、なり(同)少將ノヌレタ帯刀ダゲりいきたれば
又あど、よりいかにまりてゐたり(伊勢物)^七篋も笠もとりあへてあど、よぬれ
てまどひきよなり(源夕あは)^七汗もあど、よなりて(うつろ國讓)^下十八「只あはよ二
三の御ぞれ袖のあど、よなりぬまぞあは給ふ(万)^十「朝霧よあど、よぬれてよぶ
こ鳥三舟の山ゆかたあはたる見ゆ(夫)^八顯季「さみたれよいまれの岡れよと、ぎすあ
ど、よぬれて啼とたるなり(躬恒集)^四四十「秋の野よ花見よくればあら露よあど、
よもどがぬれよけるりか(金葉)連哥「雨ふれば岸もあど、よありよけり(更級日

記)六十草の上よむりまきなぞを打敷てうへよむしをよきていとむりかくて夜

をありすかしらもあど、よ露おく(うつろ國讓)^下十七「あせよと、よぬれて

を道(拾愚)上「人ともぬ冬れやま路のさびよさよかきねのをまよあど、よおひるて

(万代)雜三「風をいたま田中のくろれやぶがくれひかけの方よあど、よ鳴なり

あどね(榮月)宴^七五十心ことよ御あどねかと参りさるべき女房達かと花やうよさ

うそきういいてゐていらせ給へと申せば(源末つむ)^五十御あどね打おき引つくるふ

(同)盛^四いといのびやりよておこしましたりつまよのまよ御あどねまららせて

あどけかく(源行幸)^二十内侍のりみよやづりへる人かくてのかのどころのまつり

ことあどけかく女官などもおややけことをつらうまつるまたつきなく事みたるよ

やうよあんありけるを(源帶木)^八直衣をりりあどけかくさあし給ひて(とりり

へもや)一かやうの君たちのおのづからあどけかくもあるをこれいといとく今

よりまかへしくさえかしこくて(古事談)^六八十有余ノ后授此曲之由^云老耄ノ間

無四度解授タリケリ(著聞)^十競馬^ノ所敦文前またたりけるがそこあどねかく

見えけるをあどけあき(源帶木)^卅八ねよりけることあはあどけあき^{云々}(宇治拾)^九廿一

大隅守なる人國の政を志すめおこなひ給ふあひた郡司の志とれなかりければ召
しやりていましめんといひて先々のやうに志とけおさ事ありけるよの罪まきせ
ておさくかろくいましむる事ありければ一度はあらせたびく志とけお事あれ
ばおもくいましめんとて召かりけり(夫)十(小町集)九「志とけなきねくされ髪を
見せトとやまたかくれたるけさ此朝がほ(源末摘)卅御びんつれのしどけおれをつ
くろひ給ふ志とけな(公忠集)卅「そころびてまねく袂と見えしりば志とけお
とて我ぞむをび志とけかけ(なりり)一(榮玉の臺)十わざとなう志とけかけある
さぬのつまをとりてまゐる(空穂藏開)上、一例のやうよのあらで打ひぐみて兵部卿
の宮源中納言のよとて姿こそしどけおかりり(ガ)

志とき(和名)十三 黍餅、漢語抄云黍^{之度}祭餅也(宇治拾)四 志ときをせさせて一を

しきとらせたれば(新猿樂記)五條ノ道祖奉^{ニシテモヤヒヒナヒラテテ}黍餅千葉手

志とみ(源夕顔)初かどハいとみのやうなるをおしあけたるみいれのそをなくもの
さうあきすまひを(榮玉の臺)十らうこたどのおとめてめぐりまたて志とを志とめ

て(更科日記)かどせしたる所のめぐりかどもなくてかりそめよりやれ志とみなご
もかしをたれかけまくかど引さり(延喜式)卅木工寮七板部立いとみ(枕)十三 供人

の立部をいぐいのもとよて雨ふりぬべしなご聞えたるもいとよく

志ち(質)うつろ(吹上)下 此節會よとき給ふ御まろしを質よおらん云々御まろしとり
いで、大くら史生の家よ錢十五貫が質よおさしやりて(補)宇治拾)一 おろし、志ち

をやとらるべく候らんといふ(同)七 同そのとりたりし志ちのこぶかへしたべといひ
ければ云々志ちのこぶりへしおぶどとて

志ち(榻)宇治拾)十四 金の榻足の下よ出さぬそれをふまへてたてるよをへてくるし
みかし人の見るよ此榻みえせ

志ち(車)源葵)七 志ちなども皆おしやられてすゞろある車のとうよ打ちけたれば
又かう人ころくくやしう云々

志ち(實)源(源)帯木)十 畫ノナ志ちよ似ざらめどさてありぬべし(同)十 今一たび
六〇 一フ所ニ

とりからべてみれば猶志ちよなんよりける(うつろ)藏開)上、七 大將辞し給ふ御表々
又奉らせ給ふ此たびもとめられせ右大弁季房をめて云々志ちよおせしてとゞ

めらそづく御心とめられよ云々 則御せんよてつくりかきて奉る(同)嵯峨の院)九 國
ゆづりいし志ちよいつろとよまべらん(同)卅 おとゞ此事志ちよ定りなば又の日法師

よかりなんかふより世よへまどるべきとおせしなけきて(源早蕨)十 されどとち
八

の御心をへいと哀れまうしやをくぞおもひきこえ給ひける(同 東や) 十ほりの
おとぎ、守の子とも思ひわりをまたトちを尋ねらん人もなりくおとめ思ひ
ぬべたこそりかしけれおおもひつゞく(同 上) 六おちの母君よりも此御方
をむつましきものよたのみ聞え給へり(同 東や) 四十き、よくトちあらぬこと
をもくねりいひ(補 源 常夏) 五そのいま姫ぎまのようせきバトちの御子よあらト
り

おちよう 實用(伊勢物) 百三昔男ありけりいとまめまどちようよてあぞなるこゝろ
なりけり

おちらい 失禮(弁内侍日記) 下御おちらいのたびよ云々道よおちらいよて云々

おちのそーがき(拾玉) 六「とよりくまう記數かくや我からんおちれそーがきおぎ
のそねがき(補 千載) 戀二 俊成「おもひきやおちれそーがきり記つめてもよもおおト
まろねせんとそ(新千) 戀三 山本入道 前太政大臣「つらかり百夜の數の忘られて猶たのまる
るしおちれそーがき(同) 同 爲名「いつそりのかむさへ見えてりかしきいこぬよつめれ
るおちれそーがき(新後拾) 戀二 前僧 正弘賢「小車のしちのそーが記いりてなぬるよの
數をそへて待べき(續古) 戀二 法 印 覺寬「百夜まであそでいくべき命りのかきもそーめト

おちのそーがき(續千) 戀三 爲世「かぞへてもいつまでひとりまたれけん百夜も過ぬお
ちれそーがき(万代) 戀二 光頼「あるや君おちれそーがきこゝのそちまた九夜よこよひ
なるとい(同) 同法 印 信忠「百夜とて待べたはどのこれよりの思へばりかしおちのそー
が記

おちや 七夜(源 柏木) 一七夜の内よりそれもおそやけさまあり
おちやう 仕丁(神祇式) 春日神四座祭 云々 仕丁二人 常陸國鹿島 (つれく) 卅六 仕丁
やあるひとしなさいひおこせたるこそありがたくうれしけれ
おちやう 使廳(つれく) 百六十 三段此法師をとらへて所より使廳へ出たりけり(注)
檢非違使の廳也

おち 尻(源 空蟬) 一小君御車のおちよて二條院よおそいまぬ
おちをな 尻(サキトイフ) 卅一その男が尻を血あゆをりかからせけた
まへ

おちさかつ(宇治拾) 六女の尻よたちてゆらくと此くちなそのゆけを云々これが
せんやうとんとておちよたちて行よ(枕) 卅三ことおのそもいされど尻よたちてこ
そいけ(牛カ) 卅一さ記よつとまもられいくものきたかけなるの心う(多武峯物語) 兄君

のなり出給もん^補志り^六またちてありけんどこをおもひ^補り^{十四}人々志り
またちてをぐみの^補り^六その^補り^{十二}またちて二百人のつもの^補り^{十四}たれ入て
^補り^四の倉のいりむところを見んとて志り^補り^{十四}またちてゆく^補り^{十四}女いとり
なく^補り^{十四}またちておひゆけどえおひつりて

^補志り^九がね^三宇治拾^九こもんのあ^補り^三のいりりさ^補り^三あがりたる^補り^三尻^補り^三がねをあらう
つれて

志り^補へ^四で^補り^四空穂^補り^四藤原の君^補り^四四十かみ^補り^四なまを^補り^四つけて志り^補へ^四で^補り^四志り^補り^四大きある木^補り^四
志り^補り^四つけ^補り^四り

志り^補へ^八ぎま^補り^八源^補り^八行幸^補り^八志り^補へ^八ぎま^補り^八いさり^補り^八ぞ^補り^八て^補り^八う^補つ^補り^八あ^補て^補り^八宮^補り^八三^補かう^補り^八
を^補り^八へ^補ぎ^補ま^補り^八し^補う^補へ^補れ^補り^八ま^補を^補り^八へ^補ぎ^補ま^補り^八ま^補り^八

尻^補り^二を^補り^二へ^補て^補り^二落^補り^二ぐ^補り^二二^補かい^補り^二さ^補ぐ^補り^二て^補り^二出^補り^二や^補する^補り^二と^補て^補り^二尻^補り^二を^補り^二へ^補て^補り^二ま^補り^二ひ^補い^補づ^補る^二
こち

志り^補り^二か^補けて^補り^二源^補り^二帯^補り^二木^補り^二二^補門^補り^二ち^補り^二き^補ら^補う^二の^補り^二ま^補の^補り^二こ^補な^補つ^補も^二の^補り^二尻^補り^二を^補り^二う^補ち^補り^二けて^補り^二る^二たり^二
ひらなる小からびつのやうある石のある^補り^二尻^補り^二を^補り^二う^補ち^補り^二けて^補り^二る^二たり

志り^補り^十ぞ^補く^補り^十源^補り^十明^補り^十石^補り^十十^補志^補り^十ぞ^補り^十て^補り^十と^補が^補な^補り^十と^補こ^補を^補昔^補り^十の^補り^十さ^補り^十き^補人^補も^補い^補ひ^補お^補き^補け^補れ

志り^補り^五う^補ど^補り^五平^補り^五家^補物^補り^五五^補い^補り^五ま^補聖^補り^五の^補り^五御^補り^五坊^補り^五の^補り^五志^補り^五う^補と^補も^補ち^補給^補り^五ぬ^補り^五補^補り^五枕^補り^五十二^補つ^補き^補人^補
の志^補り^五人^補か^補ど^補い^補ら^補う^二と^補く^補お^補や^補えて^補り^二靈^補り^二煩^補り^二人^補
志^補り^五う^補と^補後^補言^補り^五カ^補ケ^補源^補り^五を^補と^補め^補り^五一^補あ^補か^補む^補く^補つ^補け^補や^補志^補り^五う^補と^補や^補る^補の^補り^五ま^補こ^補り^五め^補り^五

つらん^補り^三同^補り^三タ^補き^補り^三三^補志^補り^三う^補と^補ま^補聞^補り^三え^補給^補り^三ぬ^補り^三る^三こ^補を^補さ^補か^補り^三た^補づ^補人^補の^補り^三お^補の^補り^三が^補う^三
へ^補ら^補ぬ^補や^補う^二ま^補覺^補り^二え^補侍^補り^二れ^二の^補り^二給^補り^二へ^補補^補り^二枕^補り^二十三^補また^補お^補ろ^補り^二の^補り^二御^補り^二ぞ^補一^補つ^補給^補り^二ぬ^補ぞ^補何^二
ら^補志^補り^二う^補と^補ま^補い^補き^補こ^補え^補ん^補か^補ど^補の^補り^二給^補り^二ぬ^補り^二ま^補を^補り^二ま^補源^補り^二わ^補か^補き^補下^補四^補ま^補さん^補を^補り^二り^二
ひ^補き^補と^補ひ^補給^補り^二つ^補らん^二と^補り^二う^補と^補ま^補き^補こ^補え^補給^補り^二ひ^補ける^二を^補云^補り^二々^二同^補り^二六^補十^補い^補と^補な^補め^補け^補あ^二
る^補り^二う^補と^補な^補り^二り^二同^補り^二少^補り^二女^補四^補一^補夜^補の^補り^二志^補り^二う^補と^補の^補り^二人^補々^補の^補り^二ま^補して^二こ^補ち^補も^補た^補が^二
ひ^補て^補實^補り^二方^補中^補將^補集^補云^補り^二々^二い^補き^補を^補見^補て^補志^補り^二う^補と^補ま^補源^補り^二蜻^補り^二蛉^補八^補十^補か^補く^補の^補り^二み^補を^補り^二く^二
聞^補り^二え^補さ^補せ^補給^補り^二ぬ^補なる^二御^補り^二り^二う^補と^補を^補よ^補ろ^二こ^補び^補聞^補り^二え^補給^補り^二ぬ^補ると^補い^補ふ^二廣^補り^二足^補按^補り^二ま^補志^補り^二う^二
と^補ど^補い^補人^補を^補を^補し^補る^二意^補の^補り^二み^補ま^補い^補あ^補ら^補せ^補た^補ゞ^二其^補り^二人^補の^補り^二ま^補り^二ぬ^補所^補ま^補て^二よ^補く^補も^補あ^補り^二く^補も^補其^補り^二
の^補り^二う^補へ^補を^補い^補ふ^二事^補也^二

^補志^補り^十ま^補ひ^補盛^補り^十衰^補り^十廿^補七^補後^補藤^補兵^補衛^補後^補ま^補い^補能^補野^補法^補師^補ま^補尾^補張^補法^補橋^補と^補い^補ひ^補ける^補者^補の^補り^十後^補家^補の^補
る^補ま^補へ^補い^補を^補あ^補て^補け^補り^十

^補志^補り^十ま^補ひ^補盛^補り^十衰^補り^十廿^補七^補後^補藤^補兵^補衛^補後^補ま^補い^補能^補野^補法^補師^補ま^補尾^補張^補法^補橋^補と^補い^補ひ^補ける^補者^補の^補り^十後^補家^補の^補
る^補ま^補へ^補い^補を^補あ^補て^補け^補り^十

^補志^補り^十ま^補ひ^補盛^補り^十衰^補り^十廿^補七^補後^補藤^補兵^補衛^補後^補ま^補い^補能^補野^補法^補師^補ま^補尾^補張^補法^補橋^補と^補い^補ひ^補ける^補者^補の^補り^十後^補家^補の^補
る^補ま^補へ^補い^補を^補あ^補て^補け^補り^十

尻居

補

志

著聞

十 高遠其轡をもちあがら志りるまろびぬ同云々 長居をり

補

志

著聞

十 高遠其轡をもちあがら志りるまろびぬ同云々 長居をり

補

志

著聞

十 高遠其轡をもちあがら志りるまろびぬ同云々 長居をり

尻は後見してぞありける云々さしもの名人のおもひくりせ尼公の尻舞一天晴のふ
るまひこそ人からねとよくまぬ物こそなりりけれ

ありさや(新六)五内大臣「今のしもさぞりぬらん尻鞘のさしもの心はおもふれしき(夫)廿七「ものゝふのたちりりさやの虎のをこの國よてもふまばおそろ(公朝)

ありさき(前後)「宇治拾」十三やうく日もくれがさなりぬありさきみれば人ひとりも見えなりぬありさきよるうは打つて死たる人もみえせ(撰集抄)三人あり

ありさし(頼政集)下「こゑをりりかよふやりどのありさしを猶このまぬりかきこ
こちせる

ありきれ(長門平家)あしたありきれなどるわらそべの法師よありたる(宇治拾)

三やがて御尻切奉りてきとくよく申たるぞとおおせと候へば力及び候もざり
つるといひけれ(五代帝王物語)此御幸は花山院の内府のこそりの浄衣、駿馬一

て御尻切の役つとめられしこそ珍らう侍りり

ありめ(尻目)狭「下りりめとづりり見やりつ」(同)廿五尻目よみおこせ給ひ
て(源夕顔)四尻目よ見おこせて(同)葵八やゝゑみつゝ尻目よとめたまふもあり

(同)紅葉賀)卅いとねたけなるあり目あり

ありび(源梅あえ)廿すくせのひくりたよやをりくしきことよありくしてあびく
いとありびよ人ころきことぞや(岷)二尻のよこくなるよいへり哥あども結句のた

よわきをあわびとてきらふ也後干とかけり(干)廿

ありひく(源花の宴)十えび染のあさがさねありいとあかくひきて(注)下襲のあり
なり則裾のことなり(同)行幸)十さくられあたがさねいとながうありひきてゆる
ゆると

あぬ(長能集)「老ぬるもよかきもともよかぬ世よものおもひよあなんとそら

ん(古)戀四「こひいといたがなづけんことあらんあぬとぞたゞよいふべかり
ける(續古)哀傷「うけれともいけるのさてもあるものをあぬる身のみぞかなう

りける(十訓抄)十一あぬとても哥をよみたりけり(拾)戀一「こひいなんのちの
なよせんいける日れさめこそ人のみまくるしけれ

あぬさぐり(源帚木)十女は此人のおもふらんことさへあぬをりりこりなきよ(同
東屋)卅たぐいみとうあぬをりりおもへるがいとよけれ(和泉式部集)上「今

いとていくをりりおおるればいとあぬをかりおふへどもみせ

あぬべく(源神)五十かんの君のされりのことちりてあぬべくおぼさる(同行幸)卅一

み木丁のうしろあまてきく女房ナカサネあぬべくおぼゆナカサネ

あぬら(散木)一をみあへしあさおく露をおびしめてむせお袂やしれしぬらん

ある(源寄生)七十今の兵部卿宮の北の方こそわたり給ふべければりの宮の御料

ともいひつべくなりたり(同松風)四みづかららうをる所侍らねど又あつた

へ給ふ人もなけれ云々とててろかくろへ侍りつるかり(今物語)感心のあまり

いる所なとたびたりけるどなん(宇治拾)七父うせまけり云々ある所なともなくて

かまへて世をすくしけれ(伊勢物)六十むら一男つのかまへる所ありける六段

(十訓抄)三のちよのあるところなどさびりけるどなん(玉葉)二二條院さぬさい

その國よいる所侍りける煩ひあるまよりて鎌倉右大臣よろれへんとてあづま

下り侍りけるよいのでとくなりて云々(源推の本)初六條院よりつとさりて右の

大殿あり給ふ所川よりをちよいとひろく(千載)旅道因尾張の國よあるとあり

てあさし侍りける比云々(伊勢物)初かすがのさとよあるよしりてかりよいまけり

(源松風)四さちぶさいへばさらし其田などやうのこといこよあなるまどたゞ年

ころのやうよおもひてものせよ(拾玉)五「ならのみやこかまがの里よわれゆり

べいるよしすべき人のなきこそ

ある(源夕顔)四いりてさあなるぞあり給て(源植柱)八北の方のおぼし

あけくらん御心もあり給て(古)誹諧「何りその名れたつことのをしから

んありてまどふのわれをりりり(信明集)廿「おもふことありて久しくありぬと

いさくり死りぬりありてあらぬりありさこえ(源植柱)十北方ヒゲ人の御つら

さいともかくもあり聞え(同玉葛)廿見奉りならぶるまかの后此宮をわたりさこ

えせ姫君の云々ありせば(古)戀二「おもひつゝぬれをや人の見えつらん夢とより

せばさめさらま云々あるべ(古)戀一よみ「あるしらぬなよりあやなくわけていと

んおもひのみこそするべかりけれ(貫之集)下廿「けふみれば鏡よ雪ぞふりよける

老のあるべの雪よああるらん(朝忠集)卅(新千)哀「そちつゝ物おもふ人の行道

の流るゝ水ぞするべかりける(六帖)三(貫之集)下「浪間より出くる龜の万代とこ

がおもふことこのするべなりなり(後)戀六よみ「おもひつゝへよける年をあるべよ

てなれぬるもの心なりけり(源夢浮橋)十「法の師とたづぬる道をするべよてお

もそぬ山よけまどふか(同橋ひめ)卅六「琴とりよせていとつきかく成たりやあ

るべするもの音つつけてかん思ひ出らるべかりけるとて(同稚か本)八あるべあ

くても御ふみの常ありけり(同)夕かは五十かのゆふぐのなるべせし隨身さり

(同)廿「うをそくがおこなふ道をしるべまでこん世もふりきちぎりたがふか(千

載)一「思ふよりいつりぬる、袂りななみたぞこひにけるべなりける(日本

紀) 導者(菅万)指南(源 浮舟)三十たゞこれよりおもしろきとさるべし(同)序あるの

(同)三四十あやかり夕ぐれのなるべさりりたよりう尋出給めり(古)序あるの

月を思ふとてさるべあき闇たどれるころくを見給ひ(和泉式部集)下「舟よ

せんきし(のなるべもあらせしてえもこぎよらぬもりまがた(散木)「雪きえ

ぬ谷がくれなる鶯此あまをしるべし春をしるらん(拾)戀二よみ「身よこ

ひのあまりよくバ志のおれど人のしるらんことぞこびしき(古)戀一よみ

人し「あさぢふのをのゝ志の原しのおとも人しるらめやいふ人か(金葉)上

行「谷川上(木)の葉ようつもれて下まなぐると人しるらめや(同)同長實「さる

らめやよさ此つぎむしよとよもつれあき人をこひわたるとい(るく)貫之

集) 二上かゞり火此かけしるければぬを玉のよかのその水ももえけり(同)同十三

「ふく風のなるくもあるりな萩のむれをよくなりよぞ秋のきまける(源 若紫)廿九我

御こゝろひとつよのなるうおぞしくこともありけり(万)十一九「くもたまもなる

くしこゝろをくさめよみつしをらんたゞよあふまで(伊勢集)廿「とづりこし心

もなるく玉かづらたむけれ神よなるぞうれしき(古)春上「梅花よふ春べいくら

お山やみよこゆれとさるくぞありける(源 夕かは)五十けふぞ冬たつ日かりけるも

あるくうちくれて(狭)廿上君も顔のけしきやしるからんとおぞせ立給ひぬる

よ(同)同卅四「そしちよゝゑまれぬるけしきをさるく見給ひて(赤染集)「都路れこゝ

ろもしるく志をりして君たまありと思ふみちりな(源 若紫)卅六過給ひぬるもよとよ

もよおもほしなけきつるもさるれことおぞく侍るよ(同)夕かは七また見ぬ御さま

なりぬれといしるくおもひあてられ給へる御をを目をみそぐさで(同)末摘四の

給ひしもあるくいさよひの月をりしきとよおそたり(蜻蛉日記)おもひしもある

るくたゞひとりふしおれを(夫)三「志づのをがをたれつゝみのさし柳さるくもこ

とよえまけるりか(齊明紀)五雲たよも旨屢俱しこゝろをよりなげかん(るさよ)

(源 蓬生)廿杉からぬこたれさるさよえ過でなん(る)中務集「老よれる身を

ばあるよも白菊の花れ名たてよ成よける哉(源 楨柱)四十此世よめかれぬまめ人を

しもこれぞかしくとめでさよめささこく聲いとさるし(同)葵八ちよみつし

りめよとゞめ給ふもあり大殿のしるければ(古)秋上「をみなへし吹きてくる

秋風の目よみえぬとかこそしるけれ **忘る** 知々(源若菜)下八 かく人づてあら

せうにことを忘る ありかからみ奉らんよと(拾玉) 「ふち川よあどやれふ

まで身なけぬあるよりひなき世といなる 補(金葉)戀下よみ 「あふこなき身

といなる 何よけのかけきを山とこりつむらん(兼盛集) 「つられれど猶ぞこ

ひつる水無瀬川うけもひくれぬ身といなる 拾(哀傷)高光 「世中よふるぞむらあき

あは雪れりつひきえぬるものと忘る (伊勢物)一段 ひとり男いろこのみと忘る

ある女をあひりり (後)戀六よみ 「もるめのみあまた見ゆればみりさ山しる い

いくささしてゆくべき **忘れぬ** (伊勢物)段五 「人いれぬわがかよひぢの關守のよひよ

ひでとよろもねな ん **忘れ** とも (万)廿五 「みづやあせかれる身ぞとい忘れ い

どもな い ねがひつちとせのいのちを **忘れらん** (後)春下さね 「あさらよ此月

どもな い ねがひつちとせのいのちを **忘れらん** (後)あきら 「あさらよ此月

また泥たちよけり人忘れ い せを **忘れ** い 拾 戀一 「戀すてふ我名の

また泥たちよけり人忘れ い せを **忘れ** い 拾 戀一 「戀すてふ我名の

また泥たちよけり人忘れ い せを **忘れ** い 拾 戀一 「戀すてふ我名の

また泥たちよけり人忘れ い せを **忘れ** い 拾 戀一 「戀すてふ我名の

また泥たちよけり人忘れ い せを **忘れ** い 拾 戀一 「戀すてふ我名の

心を **忘られ** (源東屋)十 北方詞 哀れや 浮ガ入親 親よ忘られ奉りておひ立給たま い

バ **忘られぬ** (後)賀朝法師 「身をぐとも人よ忘られト世中よ忘られぬ山をしるよ い

も **忘られん** (万)十一 「あふたづれささぐ入江の白菅の忘られんためとこちた

かる も **忘られ** (後)戀三三條 「あふ い おむ あふ さ り 山 の さ ね か づ ら 人 よ 忘 ら れ ん

れでくるよ い も が あ 忘 られ い (平家物) 九梶原まづ我身の上を い 忘 られ ト 源 太 い

いづくよあるや ら ん と か い い り か な ま り た づ ぬ る ほ と い 忘 ら ま い (古) 春上 「鶯

の谷より出る聲なく い 春 く る こ と を 誰 う ら ま い (拾) 戀三廣 「秋萩の下葉を い み せ

い こ す ら る い 人 の こ い ろ を い り で 忘 ら ま い 忘 ら ま せ バ (新古) 哀傷 「あそれ人けふ

の命を い 忘 ら ま せ バ あ よ もの あ い 契 ら さ ら ま い 忘 ら で (後) 雜二 枇杷 「橘の葉の い

もりの神のま い ける を 忘 ら で ぞ を り た り な さ る か (源柏木) 廿 此 恨 も や か た み

まの こ ら ん と あ ち き な さ よ こ の 世 れ そ い り を い 忘 ら で か く もの い 侍 ると 聞 え 給 ふ

(同) わか あ 上 ノ り こ い あ ま さ もの せ ら る べき 人 々 を 忘 る べき よ も あ ら せ り

(宇治拾) 三 八 別 當 が 妻 こ と 男 よ う た ら を れ て あ と を く ら う て う せ ぬ 別 當 心 を ま

ど い て 佛 の 事 を 佛 師 を も 忘 ら で 里 村 よ 手 を こ り ち て た づ ね も と む る 間 七 八 日

を へ ぬ (源夕) の は 三 十 ま こ と い あ ま れ 身 あり と も さ さ り 思 ふ を 忘 ら で へ た て 給

ひとりばなんつらかり(空穂 藏開)中九。大将かくいひ騒ぐもあらでいと静りよ

あゆみて恋五あらでも(枕)十家入るたらん人を恋五あらでもおせせり恋五あらざらば

(万代)あらざらん源 東や廿北の方此をを見すて、あらざらんもひがみたらんとおも

ひねんトて恋五あら源 東や廿北の方此をを見すて、あらざらんもひがみたらんとおも

泥かりとも(枕)一哥ひとつかけと殿上人は仰せられぬるをいみとるかきよく、

そまひ申人々ありけるさらし手のあしきよき哥の折ふあそざらんをもあらトと仰

せられければの宣長云俗ニイフかまひ給を恋五あらトめ(万)二天照日女之命天

平波所知食登恋五あら(古事記)十汝命者所知高天原矣恋五あらせぬ(新拾)英時一一た

れゆゑのかみたとひとのおもふらんあらせぬさきまぬる、袂をあらせん(万)廿六

「ひたちさしゆりむかりもがあが戀をあるてつけていもよいらせんあらせ(大

和物)二「あどろより外よひをのよるものりあらせはうぢ此人よとへ(貫

之集)三下(上帖)一「あまの川水たえせなんかさゞぎ此橋をあらせたゞ(廿六)

ん(信明集)廿「うれ事も山道あらせたづねこし我みくまのよ入やあなま(前太

平記)六册悪所難所もあらせさんトよなりてぞおちたりける(十訓)七家の隣よ

り犬出さぬ云々又おもうちつりぬ妻子かともさあがらありけりそれをもあらせ

身をりり只一人出たるを(源 東屋)三これりの御爲よもなよがーがめのわらへの爲

まも幸とあるべき事よやともあらせとよろいけいふ時よ(宇治拾)二のけさま

よかるやうよいたる足を大學の衆とりてけり云々其手よさけたる相撲をなけ、れ

バふりぬれて二三段さうりあげられてたふれふよけり身くざけておきあがるべ

くもあかりぬそれをバあらせなりむらがあるりたさまへ走り、りければありむ

らめをかきて逃けり

恋五あら(千載)五とありて侍りける男のこと人よ物申と聞て云々さかみ(後)四雜

人々あまたありて侍りける女のもとよ友達のもとよりこの頃におもひ定めたるお

めりたのもしき事なりとたふれおこせて侍りければ(伊勢物)五段殿上よさふら

ひける在原ありける男はまたいとこか、りけるを此女あひりりりり

あらま(三代實錄)四十六以雨石鏃之惟兵役示凶也これらうたよ文よもをさを

さみえぬ詞あり和訓葉よ新古今の哀傷部能因があそれ人けふの命をあらませバと

いふ哥を引てあるましとあらませとかよへりといひさるひむけよことバのそちを

もあらぬ説よてこらふよこへ備和訓葉云日本紀よ惟字相字なをよめり驗欲の

義よや

ある一(安康紀)十納爲信契(源 桐壺)十かき人のすみうたづねいでさりけんある一

のかん一なりならま一り(同 帚木)九人一れぬおもひの一ある一ある一ち一て(同 須磨)廿大江殿といひける所の一いたくあれて松をりぞある一なりける(同 花の宴)

六扇をりぞある一よどりうへて出給ひぬ(云々)(同)八かのある一の扇(古)春下射恒

「ある一かきねをゆかく哉うぐひすれこと一のみちる花からなく一

ある一(源ゆふかは)十何一がくれが一とかぞへ一の頭中將の隨身其小舎人一らそ

をなんある一よいひ侍り一

ある一(源若紫)十かやうなる人のある一あらそさぬ時一たかかるべきもたゞ

ある一よりいと一ち一うおもひ給へつ一とてなん(同 夕顔)廿いむ一どうけなど一して

そのある一よ一やよみ一がへりたり一を(續紀)廿七異奇驗乎阿良波之(源若紫)初かぢ

なさせさせたまへ一ある一かくて(古)春上よみ一「ちりぬれば一こふれとある一かき

ものをけふ一そさくらをら一をりてめ(狭)廿四上けふ一誠一よひとつ心一よりけてくら

侍りつれば一かどてり一其ひりもかたう一なとたれも一きを一いう一ある一みせ

たまそ一かひかく一こそ侍るべけれとの一まへるを(源 桐つは)廿おもらん所一

たまたづねゆりんとねがひ給ひ一ある一よ一つひ一ようせ給ひぬれば(同)をとめ一八

かく一さりのある一とある一か一ま一が一を一ら一せ一て一やお一や一け一ま一つ一う一まつ一り一た

まふ一

ある一(カヒナカラ)十八一「一と一ぎ一今一か一せ一て一あ一す一こ一え一ん一山一ま一なく一よ一も一あ

る一あらめ一や一も(源 若紫)廿八一聞え一あ一らせ一ま一ふ一と一更一よ一何一の一ある一も一侍一ら一ト一もの一を

(垂仁紀)何益(シカアラン)

ある一も一活一しい一へ一り(万)十七一「一あ一た一ら一き一年一の一と一め一よ一豊一の一と一思一流一須一登

なら一雪一れ一ふ一れる一(同)七一「一玉一た一れ一の一を一ま一と一り一獨一居一て一見一る一ある一か一き一ゆ一ふ

づく一より一も(同)十三一「一ま一を一か一み一も一さ一れ一と一わ一れ一の一記一を一君一が一か一ち一より一な一づ一み一ゆ一く

見れば(同)十三一長一哥一な一け一ど一も一ある一を一か一み一と(同)十二一「一こ一ま一錦一ひ一もの一む一む一び一も

とき一さ一け一い一ま一ひ一て一ま一て一と一験一な一さ一り一も

ある一さ一り一(う一つ一不一樓一の上)下一十一猶一ある一さ一り一れ一た一ま一へ一と一せ一ち一ま一の一給一へ一バ一た一ゞ

かく一返一の一哥一云一々(同 國讓)上一七一そ一の一君一を一ま一と一め一兵一衛一あ一こ一ぎ一を一か一へ一り一み一さ一せ一給

ふ一と一お一も一り一て一ある一さ一り一聞一え一給一へ(同 藏開)上一廿一其一お一と一ま一あ一さ一り一の一よ一そ一よ一て

も一い一と一り一さ一ま一して一内一の一更一も一い一ま一あ一る一さ一り一打一不一の一め一く一ひ一る一の一り一な一と

のことよもあらせ(源松風)廿小鳥あるさかりひきつけさせたる萩の枝かどつと
よしてまゐるれり(同繪合)四 なるさかりり聞えさせ給へ(拾)雜上「ゆく末れなるさ
かりりこのころべき松さへいたく老よけるりか

なるの帯(源寄生)四十。中宮の御腹もさこふくらりまかりたるよかのさち
給ふなるの帯此ひきゆされたるをどかといとあされままたかゝる人をけぢりく
ても見給ひさりけれはめづらくさへおぞたり(孟)懐妊の帯也○信友云件ノ文
句宮ノ也

ノ趣ニテハ衣服ノ上ヨリ腹ヲ結フナラヒナリシトキニエタリサテなるの帯トモ
イヘルヲオモヘハ懐妊レルヲ祝キテ其表ニ帯ヲ結ヘルナルベシ後世ソノアラハ
ナルヲ恥テ膚ニモノスルナラヒトナリハタオノヅカラ婦ノ力ニナリテ快クオボユ
ル方モアルニアハセテ其功驗ヲモ附會セルモノ也今モ邊鄙ニテハ妊帯セヌ婦モ多
カリトヅサテ五箇月ニ當ル比妊帯セル例ハ東鑑壽永元年三月九日己卯御臺所御着

帶也千葉介常胤之妻依殊仰以孫子小太郎胤政爲使獻御帶武衛奉令結之給丹後扇候
信膳七月十二日酉剋御臺所男子御平産云々 鳴絃役師岳兵衛尉重綱云々 戌剋河越太
郎重頼妻依召參入候御乳付トアリ五ヶ月ニシテ着帶トキコエタリ

補 なるの煙(新勅)雜四前「あむト島なるのけふり見せわびて霞をいとふ春
内大臣

の舟人

なるの竿(夫)十八大炊御門「初雪のなるの竿いたてしとをことも見え越
右大臣家佐

のしら山(同)同「この山たておく竿のりひぞなき日をふる雪よなるのみえねバ
同

(山家)下「ねとたよなるの竿やたてつらんこのまぢつるこの中山
さい

なるの杉(夫)三光後「ささらぎやけふはつ午のなるのとて稻荷の杉れもとつとも
かゝ(堀次)顯仲「いなり山なるの杉をたづね来てあまねく人のかさまけふりな

(蜻蛉日記)下「いかり山おそくのとをこしはけりいのるなるの杉をたれみて
下

○契沖云更科日記五十九「も稻荷山より給するなるの杉といへり三輪の山もと杉
たてるかどいふの六帖よとこれ御哥といへりそれ御哥よりなるの杉といふこ
とをよみて杉ある所といづこよもいふべきよ狭衣のたづねなるなるの杉
もまがひつゝかは神山よ身やまどひなんと賀茂よもよめり

なる人(源柏木)八又なる人もかくてたよよんことの哀よさりがたうおぞえ侍り
しりバ

なる人男女の間(枕)十一豊前といふ采女のくまをけまさかなる人かりえび染の
織物のさしぬきをきたれはけまさの色ゆるされはけり山の大納言のこら

ひ給ひて(源 淨舟)廿此内記がゑる人の親大藏の大夫なる者はむつましく心やまき

まゝの給ひつれたりけれ(枕)二、二がゑる人よであるほどをやうみゝ女のこと

不めいひ出ゝなどするも過て不どへまけれとなすよく(同)三、ゑる人のなのりよ

いふとむねつふるらん(仲文集)三、ものめをやらんとなき物よのおもひかか

らまたゑる人多かりけるまもとをばまゝのまよて物がさりなんどして云々

ゑるもの(汗物 盛衰)五十五、「まを此なる木曾の御れうま汁りけてたゞ一口は九郎

よゝつね(枕)十六、さくみの物くふこそいとおやゝけれ云々先もてくるやおそれど

汁物とりてみなのみてかそらけいついすゑつゝつきまあせをみなくひつればを

物のふようなめりとみる不どま(抄)江次第ニモアリ

○補(一)る(榮 とりへの)廿まをさくまおこしまをかりとて云々ひをろまかりぬれば

まやゝるなどあえさせ給へれば

ゑるま(記 千載)雜下、短哥、みをもとあまりひとと出雲のみやの八雲よりおこり

けるとをゑるまなる(源 わかあ)上ノ何ごと人も人よことなるけぢめをばゑるゝつた

ふべきあり(補 後拾)詞 太神宮のやけて侍ける事ゑるゝ伊勢國ま下りて侍けるま

ゑるしノ所
見合スヘシ

ゑをり(頼政集)上、廿「ゑをりせゝ柴のさ枝れうづもれてかへる山路の雪ままどひ

ぬ(六帖)六、下「行りよふやまのほそみちいりかればゑをりもみえてふみのたゆらん

(新古)雜中 西行 「ゑをりせでかやまふかく分いらんうきこときりぬところありやと

(同)春上 西行 「よゝ野山こぞのゝをり此道かへてまたみぬりたの花をたづねん(土御

門院御集)「まよふべき末のゝをりのゑらねどもけふふみをむるこひのみちゑを

(大和物)ニ、「ゑをりしてゆくさびかれどかりそめのあそれゝらねばかへりゝもせ

ト(六帖)六帖、山の題、「ゝをりして行まゝ物をあひづ山いるよりままふ道とゝりせば

(山家)上「ふる雪まゑをりゝ柴もうづもれておももぬ山ま冬でもりする(月詣)二、

家「花見んとまやまゝけ山こくるまよ心をさへもゝをりつるりか○瀨臣云木の枝

を標折(シテ)て道ゝるべとをるま山深く分入て心を勞するをいひよせたり勞する事を骨

を折るといふま同義り新撰六帖ま骨をゝるとよめる歌二首見ゆ

ゑをり(源 夕霧)廿目おゝゑをりてあやゝき鳥のあどのやうまかき給ふ(同 御法)十

めもみえ給まぬをゑひてゑをりあけて見奉るま(同 葵)四十目をゑをりつゝま

ふを

ゑをりいたま(枕)十六、せめてゑをりいたゝるこゑゝのさすがままたまぎれぬ

忘りりの酒(古事記)廿三ノ八塩折之酒

忘る(狭)十四中いとあつかもけなりつる前栽の草ども雨よこちよけようる

布へる中は大和撫子のしをれさるけしき中よもらうたけあるを(源)十お前の五

葉の雪よしをれて忘た枝りれさるをみ給て〇契冲云風ノ草木ヲ吹シナルトイフモ

キハメテイタマシムルヲイヘバ今モイタマシムル心ナリ(後)雜四一人こゝろあら

し風のさむければこのめもみえ枝ぞしをる(源)推か本四目もみえをやとお

し忘りつゝ見給ふ(同)夕あはしねざめくおぞしをる(補)風雅(雜中)岡

のべやなびりぬ松の聲をかして下草しをる山おろし風の玉葉(秋下)永秋風の

記され松をしをるよし月の雲をのさりよぞゆく(万代)夏兼「かへるさの道れし

るべよみやぎの、花まつ萩をしをりてぞゆく(月詣)戀中「かぞしををぞ戀草れ

ゆりりとなつさふ露し袖ぞしはる(新葉)冬中院入「まはるく山の

しや雪れつるらんあかしのひさら風しをる也(續拾)秋下後久我「月よゆくと不

やませり此かり衣しをる、露し夜に更しけり(同)羈旅如「しをれせむををれてい

でし春雨れふるさと人も袖ぬらすらん(續後拾)羈旅長明「旅衣たつ曉のさりれより忘

をれしむてやみやぎの、露(大和物)二忘をりしでゆくたびなれさかりをめれいの

ちしらねバかへりしもせト〇直解云父の折檻まあひてゆくを道の標折のこととい

ひをへしあり(古)秋下「吹からし秋の草木の忘をるればうべ山風を嵐といふらん

忘をる(人)責(伊勢物)六十此女のいとこの御息所女をばまりでさせて殿のくらよ

こめて忘をり給ふければくらよこもりてかく(源をとめ)卅「紅のあみたよふり記

袖れ色を遠みどりやいひしをるべき(落くほ)一此北のへやよこめてよ物かくれ

そ忘をりころしとよと老かけて物れおぞえぬまよしの給へバ

忘はる(人丸集)三(新古)哀(万)二ノ「久らたれあめよ忘る、君故し月日も忘

らせ戀こたるらん

忘をれ(源)帯木卅むけよおもひしをれて(同)野分二十まべ見えてがたかりし花さも

の云々忘をれふしとるをを給ひけり(新古)春上「霜まよふ空しをれしかりがね

のりへるつささよ春雨ぞふる(万)十九ノ「こと忘けとみざるあひたよ梅の花雪よ

しをれてうつろもんか(補)源(推か本)卅「おぞしをれておぞするも(新古)秋下

皇「さびしき山み山の秋の朝くもり霧ししをる、楨のしたつゆ

忘をれ葉(夫)廿五「みぎとある蘆の忘をれしふささやぎこりりもよるをまの、そ

まかせ(補)拾員上「をしがものいろようつろふ池水よそれともみえぬあしを

れ葉

〔志〕 皺(檜垣姫集)四天王寺「老ぬればとしいかくしてありぬべし志さういやまづ人よみゆれば(源 總角)八大方例の見奉るよ志わのおるこゝちして(万)九五くれおる

のおきての上よいつくゆり斯和りきたり(源 かな)下ノ尼君をばおをどくハ老

のおみの志このおをかりよ人めかしくてまうせさせんと(貫之集)上ノ「菊のち

なひぢてあがる、水よさへ浪のしを死やとよさりける(好忠集)「老よけるよを

ひも志このおをかり菊のつゆこそけさい(方)九九こり、りカハ皮毛シラミ皺奴

(古)長浪のしよやおぞ、れむ

〔志〕 源(紅葉賀)十けふいとこゝろかき人の志さよも侍るりな(同 夕のほ)十舟

道の志さよとてすこゝろみやつれたる(同 夕きり)七十こゝろをへありて志つら

ひたりやまどのりみの志さなりけり(伊勢物)八段いみトの志死もの、志さや

とて(神代紀)上三所行ザワ(狭)四十九下海山波風のけしきよりとめて女の志さ

ともみえぞか死をましたる筆のながれひきこめてやとかんハ口をしをりしきも

あそれさも見しらん人よ見せまろしきを(山風)

〔志〕 宇治拾(十四)不うけて物もおぞえぬやうよとありければ志さびて法師よか

りてけり(同)二ノあまりよまもられて志さびて大なるくそとびの

〔志〕 鹿(景行紀)八山神令苦王以化白鹿立於王前王異之以一箇蒜彈白鹿則中眼而殺

之

〔志〕 然ナリ(源 末摘)九内よりくとれ給へば志りまりりて侍るまゝあり(同 夕のほ)

四十中將のうれへしはさる入やと、ひたまふ志りをと、し春ぞものし給へり

〔志〕 續後紀(十六)今毛又志賀奈毛思行(源 是し姫)冊志り御耳とまるむりりの手など

いづくよりりこゝまでいつたそりこん(宇治拾)十二融のおとゞりどとせ給へ

ば志りよ候と申(源 桐壺)十うへも志りなん(古)春下「三輪山を志りもかくせり

春霞人よしられぬ花やさくらん(續千)神祇「人まりハあそれとおもへ春日山

志りもたのみをかくる年月(宇治拾)六こゝちなりつることぞとへば志りく

とかなる

〔志〕 古事記(下)ゆづまつをき斯賀波那能如此華云々斯賀波能(万)十九長哥秋花之我色

色爾見賜イロニ見シタマヒ

〔志〕 源(帯木)五それ志りあらトとそらよいり、ハおしそりおもひくたさん(同

夕のほ) 四十これハしりへたつるこゝろもかりりき(古)雜下「こがいはハ都のた

つみちりぞむよをうぢ山と人いふあり(續紀)廿四コトミヤ別宮爾御坐々オホミヤサ牟時シカ自加得言也(大和物)五「これちりな死てぞ人よこひられし今こそよそよ聲をのみきけ

わづらひ侍りしりかいらそりいむをどうれおどして(同)五四十人よものおもふねー

きをみえんいそづりしきものよ給ひてつれかくのみもてかして御らんせられ奉

り給ふめりしりと語りいづるよ(同 薄雲)卅一此過給ひよ御ことよあさましうのみ

おもひつめてやみ給ひよしり長きよのうれそしきふととおもひ給へられしを(同

紅葉賀) 卅三此御事のちそすも過しり心もとあ死よ(同 柏木)九いとかしこうとり

りへしつとひとりをおろたりしりいとねたかりしり(同 若菜)下四いとある

まどき名をたちて身のあそくしりくなりぬるおけきをいみづくおもひしめ給へり

しりいとそしくけし人がらをおもひし(同)八おお死おとゞのあたりよ今のそと

つりれよしりとなど年比心えぬさままきしりいとそしりかありしを(同 夕霧)三四十念

頃よのちのことをもいとなみ給ひしりごがたさまといふ中よもうれしり見奉

りし(同 松風)十をさなきこちよそしりしりやうくしりちとて(補

枕) 卅四か死捨よなどおせせと侍りしりと申せば(詞花)春惟成「きのふりもあら

れふりしりちがらきのとやまのかそみ春めきしけり(忠見集)「春雨のふりそめよ

しりうつたへし山をみどりよなさんとや見し(新後撰)戀六道一こととりとこひ

ままでのおもひしりつらきまたよぬるし袖かな

ちりちり(千載)戀五「ちりちりちぎりし中もかそりけりこれ世よ人をこのみ

けるりな(源 蜻蛉)四十七ちりちりおせしなけく人のあらましり(補)後拾

哀傷「ちりちりちぎりしものをこたぬ川かへるるどよのこるるべしや(重之)

ちりのあれと(拾玉)二「いづくより月のやどりぬちりのあきどかけをみぐし玉

のる此水(古)春上前おはさか「といふればよもひのおいぬちりのあれと花を

これバ物思もあし

ちりり(宇治拾)七かくそらたちちりりて(狭)三上母代おひつれて袖をひりへて

云とちりりかゝるけしきいとそしりければ(平家物)十一かやうよちりられまらせ

んよりの枕) 卅一いとどらたらちりりてかながへて

ちりりどて(古)雜下「ちりりどてそむかれかくよことしあればまづおかけかれぬあ

〔新千〕戀三 能宣「つらさをもりてぞいそぬちりりとおもひたゆべき心ならねば

〔補〕〔志りるべ〕〔宇治拾〕五よこ坐の鬼志りるべ〜と、いひて〔同〕二志りるべ

くておのれよの見えさせ給へるなり

〔志りれども〕〔土佐日記〕云々志りれどもひねもすよをみりせた、せ此りぢどりの日

もえむららぬりさるなりけり〔神代紀〕五上十雖然〔万〕十二「梓弓末の志らせ雖

然まさりの君よよりよし物を〔同〕十九をこいうらみぞ之可禮杼毛〔同〕六「やま

と路の雲かくりたり志りれどもこがふる袖をなめしとおもふか

○〔志りあれども〕〔古〕序この哥天地のひらけそとまりける時よりいで死よけり志り

あれども世よつたむることの云々〔同〕志りあれどこれりれえたるところえぬとこ

ろたがひよかんある

〔補〕〔志りな〕「秋ならで妻よぶ鹿をさし、しづなをりから聲の身よひしむやと〔齋

宮女御集〕「いりてなほ春れ霞よ成よしづがおもそぬ山よかゝるこざせと〔曾丹集〕

「心うしふりき山よも入よしづのさりよおりてうき世すぐさん

〔補〕〔志りかぐら〕〔大和物〕五物りさふるひいよしとこなん志りながらそこびりへ

して

〔志りかくのべ〕〔新古〕釋教。五百弟子品内秘「いよへれ鹿なく野べのいほりよも

心の月にくもらざりけり

〔補〕〔志りらば〕〔万〕十四「ひとづまとあせりをいそむ志からばりとなりのみぬを

かりてきなとも

〔志がらみ〕〔後〕戀六よみ 人しらす「あせり川こゝろれうちよながるればその志がらみいつ

りよどまん〔拾〕雜下 躬恒「さをしりのしがらみふする秋萩の下葉やうへよなりかへる

らん〔貫之集〕「棹鹿の妻よしがらむ秋そぎよおけるしら露これもけぬべし〔躬恒

集〕「天の川ふねさしこたをさをしりの志がらみふせる秋萩の花〔六帖〕三上「秋萩

のそかのながる、川せよの志がらみかくる鹿の音もせせ〔古〕秋下 列樹「山川よ風れり

けたるしがらみのあがれもあへぬももちなりれり〔頼政集〕下「せれりぬるなみた

の川れそやきせのあふより外のしがらみぞなれ〔狹〕一上 御手をさへとらへてそで

れしがらみせきやらぬけしきあるよ〔拾〕戀四 貫之「あみた川こほるみなりみそやけれ

ばせきぞかねたるそでれしがらみ〔万〕六〔人丸集〕「あせり川志がらみこたしせり

ませばかがる、水ものどけからまし〔補〕〔後拾〕秋上 爲善「秋萩をしがらみふせる鹿のね

をねたれものからまづを聞つる〔貫之集〕「さをしりれをのへまさける秋萩を志が

らみへぬる年ぞしられぬ(同)(玉葉)秋上「山とそきやどあらかくは秋萩を志から
む鹿のかきもこぬりな(狹)三下「心よのしめゆひおれしそぎのえを志がらみふす
るしりやかくらん(月詣)七内大臣「ちらさ下と駒をりへせば眞萩原志がらむ鹿もあ
りぬる物を

志りのむかひ(万)八四「さをしり此むあわれよりも秋そぎのちりそぎまけるさ
かりりもいぬる(同)十五「まをらをのよびたてしりばさをしりのむかひゆらん

秋のそぎをら(鹿)ノム子ニテ萩ヲワケ行ヲ云リ

志りのその(千載)序志りのそののこしのみねのふりき御のりをささるとるよしもある
補(著聞)五「つるれそねかきつころひしうれしさいの志りありけりを鹿のそのはも

志がく 試樂(源紅葉賀)初 試樂を御前までせさせ給ふ(花鳥)御賀よの試樂調樂など
いひて舞樂の心みどもあり(源未摘)廿一行幸ちりくなりて志がくなどのしるころ
ぞ命婦のまゐれる

鹿まつ所の狸(十二類哥合)(盛衰)廿八

志りまう(事物應制)和哥序 あら玉のとしたちりへるころ此あがためしよもらさ
れぞかまへさせ給へと志りまう

志り(榮松のつえ)五 いたれとらせ給ひてまたいともけあき御をどをうつく
しみ奉つらせ給ふほさあそれよめでたしつりときたなきごさをしりかけたてま
つらせ給へれば御ぞたてまつりかふるそどもめでたし

志がふ(夫)二よみひ 「志がふべくかりもゆくちをれをそかくかた野のみの、萩の
やけ原(續詞花)上 國房 「山賤の野がひのこまもかへるかりもつせし草をしがひりけ
つ、(山家集)上 「みまくさ原のをせ、き志がふとてふしどあせぬとしりおもふ
らん。(和訓栞)顯昭の説よ志がふの草を刈て束ねて末を結び合るをいふ志がふ
ともいふツガフ心なりといへり哥よ志がへて君がみまくさしつ又まつせし草を
志がひりけつ、あせ見えたり 補(散木注)「朝ゆふまなでつ、おをを蒔りやを志が
ふて君が見まくさしつ○志がふとの草をかりてさそねてまたすゑを結びあせそ
るをいふあり志がふともいふつがふ心なり國房哥よや日くるればのがひの駒もか
へるめりまつせよくさをしがひりけつ、まつせといくらおれぬせといふなりまつ
馬といふなり(行宗集)「春草や志がふさりり成ぬらんいさゆる駒のこ、ちよけ
かる

志り(鹿木(夫)十三 仲正 「まをらをの志り木此かけもあらされてしのおくまなき秋の

夜の月(爲忠後百首) 頼政 「まをらをがまちきのーたまたつーりをまたらまみえる
よひの月りけ(同) 仲正 「山さつが鹿木れかけのひまもなきるまちの月れいでせざ
りける(今昔物語)七ツレハ高キ木ノ枝ニ横サマニ木ヲ結ヒテツレニ居テ鹿來テ其
下ニ在テ待テ射ルナリケリ

補 ちがみつく

(著聞) 二十五ノヤガて敵まーがみつれて刀をうさひとりて

ちりく

(落窪) 一、帯刀詞このたびたよ御かへり聞え給へちりくかんの給ひて心

まいれぬぞとさいかむといへ(狹) 三、ちりくたぐりまみしことありあり

つきのありさまをうたりて(源末つむ) 四、今もおそろきが不命婦詞いとりたを

らいたたわさかなちりくこそおそろまいたなれつねまかうらみ聞えたまふを

(同) 四、ちりくたぐりたれめよせてありさまとひ給ふちりくかんときこゆ

れべくちをうおぞして(同) 末摘 十れいのへたてきこえ給ぬ心よてちりくの

かへりこどひみさまふや(同) 帯木 六、いづらとの給ふよーくくと申を(落窪)

一とひせめ給ひければかくさをちりくと申ければ(枕) 六、ちりくの人こもら

せ給へりなどいひきりせていぬる(前漢書) 汲黯傳、上方招文學儒者、上曰吾欲云云、

(注) 師古云云猶言如此如此也只畧其辭耳(宇治拾) 六、ちりくの事ありて鬼の

とりたるなりといひければ(同) 廿五、ちりくおもひたまへてかんりひを引い
めて候つるといひて(源手習) 七、いもうどの尼君聞て何とぞとふちりくの事
をなん

補 ちりも

(万) 十三、三輪山を然毛かくそりくもたまもこゝろあらかんかくさふ

べーや

ちりま(万) 八(後) 上 「かさくら雪ふりつちりすがまわが家れその鶯ぞ

なく(後拾) 能因 「おもふひとありとなければ故郷のーりまがまこを戀かりけれ

(貫之集) 九、廿(新勅) 戀五 「花ならでまあるものちりまがまあなる人のこゝ

ろかりけり(同) 上(續後) 貫之 「あさらーき年といへどちりまがまよりらくふりぬ

るけふまぞ有ける(順集) 四十、地名シカ 「行りよふ舟路のあれちりまがのわたり

のあともなくぞありける(中務集) 八(新勅) 地名四 「ゆけばありゆかねくるちり

すがまこさりまきてぞおもひこづらふ(万) 七、四十 「荒磯こまみりりこちりす

がまうみのたまものよく、のあらぬを(同) 十八、 「三島野まかすみたを引之可須我

まきのふもけふも雪ふりつちり(万代) 雜六 「ゆくすゑのちりまがまこそゆりけ

れいでやさぞとい思ふ身なれと(補) 万、十二 「妹といまをめーかこちりまが

よかけまくるしきことよあるりも(万)七十一「打あびく春さりくれはちりすがは天ぐ
もさらひ雪のふりつゝ(同)同「梅花さだちり過ぬちりすがは白雪庭よふりしきり
つゝ(同)同「風まぜし雪のふりつゝちりすがは霞をか引春さりよけり(同)八十一「山
のまよ雪のふりつゝちりすがは此川やぎのゆえよけるりも(壬二)下「足引の山は
りけ野よふせしりのちりすがはやのちのびもつべき(万)十五「うめの花ちらくの
いづくちりすがはくのきれ山よ雪のふりつゝ(後撰新抄)云ちりすがは然しなが
らよなりさすがといふも同ト万葉よ然爲我二と書り下のかもト濁るべし

【およ】序(續拾)賀松色春久といふ事を講せられけるとき序を奉りて云々

【およろう】所勞(賴政集)卅八ノ大事なる所勞ありて人してかゝせてつりひける

【およち】所知(發心集)所知などあまたある中よ

【およりやう】所領

【おようどく】所得(無名抄)下披講のときをわりせ心々よものぐさりをし先達よもち
ちぎ面々よおようどくしたるけしきともおちたしけれと云々(同)上我人よゆる

【おようどく】證得(宇治拾)十四、きたりける水干をぬぎてこれよりへてんやといひければ玉のぬいの

男おようどくしたりと思ひけるよまごひとりて舟さしむちあていよければ(前太
平記)攝津守の富よちりせいざや大勢を催しかの宿所よ乱入て所得せんといひけ
れば云々かれら不可歎所得のさして置ぬ命を失ふもの多かるべしあそれしつるおよ
うどくりな云々(宇治拾)三、あそれちつるおようどくりを年頃不動尊の火えんをあ
しくかきける也今みればかうこそもえけれと心えつるなりこれこそおようどく
よ(般若論)所得不得(智度論)一入佛法寶山都無所得(法華經五百弟子受記品)若少
有所得候以爲是

【おようち】(榮若永)七、どのうちれありさまおつらひなちこいりかりける勝
地ならんとみえたり

【おようわ】承和(古)大哥所この歌の承和の御べのきびのくよのうた○仁明天皇の年
号也

【おようこ】證據(宇治拾)廿、何をせうこよてらうの給ふぞ

【おとろどろう】承仕(つれく)廿六、遍照寺の承仕法師池の鳥を日でろりひつけて

【盛衰】廿、これの當社の承仕法師よて侍るが云々社頭よありしあむらせんとてま
ゐるなりとこたふ(古事談)三、惠心僧都ノ承仕法師奉花ノ間俄悶絶死去(源 楨柱)廿

かゝる折もつとひ追従よりてかゝづき給ふさまいとめでたし
【志よる】叙位正月五日人々ノ位ヲ叙セラル、事ナリ【拾】春正月叙位のころある所
人々よりありあひて云々

【志よくこ】所課(朝野群載)七抑不論權勢庄園可勤如此所課之由依國司申請

【志よさ】所作(狹)二十六下御堂の内志づくとしてのぞりなるは行ひの聲もやめおの
おの志よさども打すれつ、聞入たるは云々

【志よしや】書寫(宇治拾)八ひとり反古の落降りたるをひろひ集めて紙よせれて經
を書寫し奉る

【志よまろ】(著聞)十一をもく、所望の事の候を申出さんとおもふが

【志た下(古)】戀三よみ八「戀くば志たよをおもへ紫のねりの衣色よ出かゆめ(躬
恒集)上ノ(古)戀三

恒集)廿八(古)躬恒「冬池よをむまるとりのつれもなく志たよかよまん人よ志
らまな(躬恒集)下ノ九「うせ川志たの心も志らなくよふかくも人のおもやゆるり
か(躬恒集)四十(玉葉)戀一「志たよのみもえわたれともうちへて我おもひをバ
けつ人もな(素性集)二(夫)廿六「敷たへの枕よたよもふさばこそ夢のたまひ
志たよかよそめ(敦忠集)九「志たよのみなぐれまされの冬川の氷れる水と我とな

りけり(齋宮女御集)七(六帖)六八重あがらあたなるみれば山吹れ志たよこそなけ
井手のりもづい(源)木四廿なめけあることや侍らんと志たよなけくを聞たまひて
(同繪合)七おとゞれ志たよ螢を、め給へるやうやあらん(同)廿ありがたき御
りへりもれ志たなりつるを

【補】【志た】(万)廿六「ひかぐもりうすひのさりをこえ志太爾いもがこひくこをら
えぬりも(同)廿四「とろいとふこなしらねよあふ思太もあそのへ思太もかよこ
そよされ(同)廿六「あがもてのわすれも之太波つくをねをふりさけ見つ、いもの
志ぬをね(同)十四ノ廿「人の子れかあけ之太はたまをどりあなゆむこまのをしけく
もあし〇此詞みな時といふこと、聞ゆるよ大平いへり今も肥後よて行いを歸
ななどいふいな此思太の轉トさるかり

【志たい】(次第(空穗 藏開)下ノ四十佛名の所大徳たち次第してひきゐて七八人參るたう
さうトてこととむ志たいいとも例の仲忠行政仲頼云(同)嵯峨の院)六十 東宮まる
り給ふよ志たいい人事をおこあひつ、(同)樓の上)下ノ六十やがて宮の御方の女房事
の志たいたて、よまべき事行ふ(榮布引)三次第よての皇太后宮をらせたまふべ
(枕)十一車比次第もなくまづくと我ガチのりさどぐよくければ(狹)一、下九月

朔日頃なすし物のあるよ中將君中納言よなり給よけり大殿是をいまくしけよ
お平したれとさのみやと次第のまよあがり給ふなるべし(鎌倉右大臣集)老とい
ふことを人々よ仰てうらうまつらせし次よよみ侍し「さりともと思ふ物から日を
へていふたいくしよよこる悲しさ(源 鈴虫)十人々の御車れたいのまよひきか
すし(同 ねのな)上^廿けよふたいとあやまたぬよてぞあそしものこりとまるかぎりあ
らば(枕)十三紅のいろうちめまをかやくせりりぞ見ゆるふたいよ白きうす色を
とあまよかきかりたる

補 進退(源 楨柱) 卅ち、おとゞよもりかるをぎし泥を泥やうよやとお平せ
とあかぢちよさささりりの事をいひさまたけんも云々もとよりふさいからぬ人の御
ことなればとぞさこえ給ける○不進退(細 孟)

ふたい 次第司(新古) 戀むがみける人賀茂祭のふたいよ出さちてなんまりり
さたるといひて侍ければ○祭の次第を司りて道の往來行列かと定る人なるべし

ふたを 下葉(古) 秋下 貫之 「ふらつゆもいづれもいたくもる山の下葉のこら色付よけ
り(式子内親王集)「ふのりよあそれの水よおもひ草をさよまよふ露ももらさ
ト補(万) 二十、「あま雲よかきぞなくかるたりまどのそぎれをさよのちあへん

りも
補 ちたもふる ちたもへ(万) 十八、「さゆり花ゆりもあそんとあそもふる心よかく
はけふもへめやも(同) 卅六 こもりぬのちたもへおきてうちあき妹がいぬれば
ちたも 舌利。早口(狭) 十二 下、哥云々 けよ母とよみかくるけよひ舌よのどかこさた
るをこりびやさしどちていひなを(源 常夏) 十せうさいくといふ聲ぞいとあそと
泥や(同) 廿例のちたもよて(同) 廿けよいりて此ちたもさやめ侍らん(同 さかさ) 十五
一云々との給ふけよひの舌よあそつけ泥を

ちたり(枕) 十一、日頃降つる雪のけさのやみて風よどのいたう吹つればたるひのい
みとちちたりつちあどこをむらくくろきかれ(金槐集) 下 「とくまの、あぎのそ
ちたり雪ふるの神のかけたるあそよぞありける(新古) 冬 國房 「さびーさをいりよせ
よとてをりべなるなられよしたり雪のふるらん

ちたりが(源 せとめ) 九 此みちより出たち給へる上達部をよちたり顔ようちちよ、
あふかどしつ、(同 夕顔) 七 ちたりがよもれなれていへるうを(同 柳) 十。右大臣
時うつりてちたり顔よおとするを(左大臣あぢきなしとお平したるもことこりなり
心)

(同 葵) 廿やんごとな泥僧どもちたり顔よ汗おしのとひつ、(宇治拾) 二、ちたり顔よ

四十

袖をつくろひて補(源藤のうら葉)十おとゞあたりが不かるあさいりなとどがめ給ふ(枕)九おとさうういてあてさるこそあたりが不なるけしきなれ(和泉式部物語)あやし死事なれとのびて物いひつる人かんと不くいくなるをあせれといひつべからん事ひとついそんとなん思ふそれよりの給ふ事のみなんさのおせゆるをひとつどのたまへりあかしさりが不とおもへささひえきこえと申さんもいとさういければ(同)けさしたりが不とおせたりつるも(月清)一「露をむる野べのよしきのいろくをそたおるむしのあたりがほなる(源わか)上ノ大將のしたりがほよてかゝる御なりらひようけさりて物し給ふも(枕)十八我のおもひてあたりがほかる人むりりえたる

あたり柳(源若菜)下ノ二月の中の十日さりりの青柳のわづりよあたりそとめたらん心ちして(催馬樂)「あさみどりやこいそあたをめりたりとみるまでよ玉ひりるあたりひりるあんきやうささりのあたり柳またそたるとかるせんさい秋さぎあでしこから不ひあたり柳補(万)十三「春さればあたり柳のどをよも妹が心よのりよけるりも(同)十九「もし死の大みや人のかづらけるさざり柳の見れどありぬりも(同)十六「ますらをのふするあけきてつくりたるさざり柳のかつら爲さぎも

補 ちたるき (夫) 卅六 慈鎖 「一づのめもおせぢるつ、よゆふまむみちたるきあされ衣すゝぎて

ちをる 下折(千載)秋上親王家甲斐 「おしかべて草葉の上を吹風よ先ちをる、野邊のかるりや

補 ちたをふる (今昔) ちたをふりておそれけり

補 ちたしらび (拾員) 下「谷せをみさくしき岩れしたしらびいりよをるべきかけぢなるらん(枕)五此ちたしらびつてづらつみつるなさいへバ

ちたがた 下地(源梅枝) 十 御てうとゞも、云々物のちたがたをさやうかどをも御覽ト

いれつ、(同) 若菜 下大將もさる世はおもしとなり給ふべきちたがたをかれは姫君の御おせをさてりいかるくあらん〇下形やがて天下の大老となるべき下地の人かり(源鈴虫) 四 講説、宮々も物の心ちり給ふべきちたがたを聞えちらせたまふ是モ下地ノ補(源藤袴) 十 髯黒人がらもいとよくおせやけの御うしろとかるべりめるちたがたなるを

ちたがた (ひ) (神代紀) 廿 遵海神之教(狭) 卅四 中 齋院の御ぐしよいとよく似給へり長さぞまたすこしおどりてやととめる御年のそよちたがたひたまへるよやと見るよ

(落く不) 四おのづからしき見えなんそれしきひてはたりもむかへも給へ
(源少女) 六時しきふ世の人の志よのたままろぎをいつつる志ようけ
しきどりのつゝ志たがふ不どの(同 葵) 五いとしきけんさも志たがひをべきおせろけ
のものよあらむとみえたり(拾) 戀五讀人「忘るゝりいざゝ我も志れかん人よ
したたがふ心とならむ(後) 秋下よみ「秋の夜は雨ときこえてふりつるの風よしき
ふもみぢありけり(竹取) 上心よ志たがふ志(源 帶木) 十かうあながちよ志たがひ
おぢたる人なめり云々かばかり我よ志たがふ心から(同 也ふかは) 九おせもて
やまよ志たがひてこそとてめしよせてと給へ(同 あふひ) 初折ふしよしたたがひて
の御あそびかどをこのましう世此ひくせりせさせ給ひつゝ(補) 拾 貫之「秋の
よは雨ときこえてふるもの風よ志たがふもみぢなりけり(拾玉) 「春風をいと
ふ心を引りへて志たがふ花を今いうらみん(山家) 上「梢ふく風のこゝろいかゞ
せん志たがふ花のうらめしきか(月詣) 釋教「いかなればおやのをしへよ志たが
こでこのふるさをいでがてよるる
○志たがもん(六帖) 下「おもせむばこれ志たがもん玉たを死うさてかけたるはが
心かな

志たがさね(源 あふひ) 五志たがさねのいろうへのそりまのもん馬鞍までみなとゝ
のへたり

志たがさ(日観集) 「梅の花うきくれなるの下がきをむらゝ染る春がすみり
か○正明云此下がきい下ぞめ也かきい紺りきのかきかりそめ汁を瓶よ入て底よる
ぬやうよくるゝとかきまをして染るゆゑいふなるべし

志たがひ(空穂 俊蔭) 一ノ君の御志たがひの御くびよつぶゝとぬひつけて立ぬる
(万) 十四「から衣をそれうちへあむねどもけしきこゝろをあがもいなくよ○左
注或本哥曰から衣をそれ字知可比あそかへばねなへのからよ言たかりつも○雅望

按スルニシタガヒノツマトヨメルシタガヒモ是ニ同(蜻蛉日記) 下。女神ニヒ、
ルかどりのひゝかぎぬ三つぬひたり志たがひもよかうぞかきたりけるいりな
るこゝろをへよりありけん神ぞ志るらんりー

志たがひのつま 下交(袋草子) 四(拾芥抄)(簾中抄) 「たまひみつぬーのたれともー
らねどもむすびとめつ志たがへのつま(源 葵) 一「なけきこび空よみたるゝとが
たまをむすびとめよ志たがひのつま(補) 蜻蛉日記) 下「から衣をれよーつまをう

ちりへー我志たがひよをよーもが(狭) 三下「たまーひのかよふあたりはあら

せどもひまびやせまゝ忘たぐへのつま
忘たぐせ 下風(千載)秋上待賢 門院堀川 「秋のくるけしきの杜比下風よちそふものにあそ
れなりけり

忘たゝる(神代紀)上 其矛鋒滴瀝之潮凝成一島
忘たゝり(著聞)廿 もとより身の忘たゝりかれば人よりもことよぞつりへける(源

未摘(片)子ヒ人 御哥も是よりののこどわり聞えて忘たゝりまこそあれ御返りの
只をり一沈方まこそなど口々いふ(同)帝木(廿)まいて君達の御爲のそりト
く忘たゝりなる御うろみ何よりせさせ給せん(同)夕かほ(卅)忘たゝりまもえ

せねば髪のをぞれ出たるも(同)橋姫(廿)わりき人の物のそと忘らぬやうに侍るこそ
かど忘たゝりいふ聲のさたをぎたるも(著聞)卅三 西をさしてそり出んとけ

れば忘たゝりなる者ども六人してとりとめけるは其身のつよきこといふをり
か(源 初音)三 千年のかけよあるき年の内の祝ごとくもしてぞれあへるよおと

どの君さゝのぞき給へばふどころ手引直つゝいとそりたあきさざりあどこびあ
へりいと忘たゝりなるみづからのいとひことくもりな〇(孟)イカメシキ也(狹)三上

四 下藹の身の物のようあきたよ名のをしければこりうよりひたをら物忘たゝりあ

る男のまうけぬものを(源 幸)十 光りこそまさり給へり忘たゝりまひきつくる
ひ給へる御有さまよをせらひてもみえ給さざりけり(空穂 祭の使)八 手ツカおと

どせちよけうある事りなとて御せりのを忘たゝりまむせびたれ御ぞの尻む
りひきて(源 行幸)十 忘たゝりまかこき方れえらびよての其人ならでも年月の勞

よかりのするさぐひあれど(枕)二 心ゆく物社頭よての禰宜なごの忘たゝりまごが
心のうちおふことかどをあやまらでまさまおしそりつゝまよく申あけ

たそ(著聞)卅六 ころきものよりの忘たゝりまたりつるはといふ
補 忘たゝく(續千)戀二 實俊 「かりまたようへまたてを蘆のやの忘たゝく烟思ひき

ゆとも(後拾)戀四 長能 「ごが心かそらんものりかそらやの忘たゝくけふりわきかへり
つゝ

忘たゝめ(源 蜻蛉)十 浮舟ノ 後の忘たゝめなどいともかくしてけるを宮まも
いり聞給ふらんといとそりく(同)浮舟(四)六十 むつりき反古などやりておごろお

どろくひとたひはも忘たゝめを灯ごいの火よやき水よかけいれさせなどやうや
う失ふ(同)玉動 初さしも深き御心ざりかりけるをたよおとあぶさぎ取忘たゝ

め給ふ御心ながさなりければ(狹)二 下九 例の御めのごの道季をりり御供よてかの

宮におさしたれば御門などもござとあさむむる人もあさむや入りて見いたし給ふ
一(宇治拾)九ノ國の政をあたゝめおこなひたまふあひた(沙石)七ノ下殿の人を具
て上らせ給ふなる御まうけせよとてこまゝと下知して見ぐるしき物をかりと
りあたゝめてよろづあるべりく用意して我身をかり出給ひぬ(宇治拾)八倉のす
みよ投直とみよ物もいれざりければ鉢の待るたりける事と物どもあさむめむ
て、此鉢をこされて物もいれむとりもいささ倉の戸をさしてぬり歸りぬる事と
一(同)三ノ夜明て又ひつぎよいれて此たひのよくまこととあたゝめてよさりいり
よもあさ思てある事と一(同)十三かくて夜あけよければものくひあたゝめて出て
ゆくを(同)十五さてこと魚なごあたゝめて桶よ入て女どもよいたゞりせて我坊よ
歸りたれば(著聞)十八さふらひどもよりあひて大鴈をくもんとてあたゝめける所
へ年よりたる士一人來りたりければ(沙石)六下守袋をこすれたりとありのまゝよ
語りければわらへこそみつけて有とてあたゝめさりまゝよて取出してとらせけ
れば(増鏡)十昔こそ受領ども、任の事と異國をあたゝめ行ひしが此頃いたゞ名を
かりよていづくよも守護といふ者の目代よりのおぞまゝきをさるれば(宇治拾)
二三物おそくあるを女どもの限してとり出取をさめればことよもあらむとくへむ

がへ思見ふせて又くるればよくくあたゝめていらんとさるよ猶おそろくお
やえてえいらせ(撰集)六此硯を見る事とよ足音のあらさりよきこえければ心まよ
ひ忍びてあたゝめおろんとさる事とよとりまづて云々さるほどよ大納言此硯を
あたゝめおろんとて見給ふよ(源玉葛)二みありしことよもあたゝめ出ていそを
せば(同)すま四万の事どもあたゝめさせ給ふ(注)スマヘノ(落窪)一うちらし給
へる物どもとりあたゝむ(平家)二物をたよとりあたゝめを門をたよおしもたて
せ(著聞)十六友正いふやうあたゝめおせたらばどの原みな引出ものを一づ、
友正よたびて(同)廿二いりよいでたちの事あたゝめてこそいあどとめければともさり
でいでぬ(同)廿一此女何りおそれ給ふいとやまよくあたゝめてん其湯の云々(同)六
三終日へうせて拍子をあぐる事をあたゝめさ云々右の樂のけふいさ、まりぬ(宇
治拾)九ノ申あたゝめたることよはあらせや
あたゝみ(神武紀)十之多儂瀾能阿誤豫云々之多太瀾能云々(古事記)中志多陀美能
伊波比母登富理(拾)物名讀「あづまよてやいなれたる人の子の舌たみてこそ物
いひぬけれ(和名)十九小贏子、崔禹錫食經云小贏子楊氏漢語抄云貌似甲贏而細小
口有白玉之盖者也(山家)下「あま人のいそくかへるひいさものひ小よそま

ぐりかうかしたゞと

志たぢめ(古) 誦讀よみハしらす 「耳かー此山のくちなーえてーがなおもひの色の下ぞめよせん

下つりた(源 松風) 廿いそとかけなる下つりともまぎらひさんかとおもふをめさま

下つくる(源 繪合) 十六右のちんの箱よせんかうの志たつくる

志たつき(源 朝顔) 十四源内侍ノいとくをけみよたる口つきおもひやらるゝこわづりひのさすぐよとつさまて打されんとい猶思へり 色メカシクアマエタ (和名) 三

張揖云 禪天二音之多都岐 舌不正也(新猿樂記) 歴齒禪也

志たね(夫) 卅六後久我 「志たねをるからのうれをふくあらー志らまやこれもたのむ木のもと 續千 (戀一) 爲家 「うれよそふ志ー此志たねのみまもりまかくれて人をこひぬ日もかー(齋宮女御集) 「秋の野此萩の志たねまなくむーのーのひかねてい

志たねとけ(後拾) 春上能宣 「とづのそむ澤べの蘆れ志たねと江もえいづるもるい來まねり

志たなき(宇治拾) 十一 青つねの君とぞ殿上の君達いつとてさらひける 云々 父の御子さゝてせいせせとて我をうらとざらんやなど仰られてまめやうよさいかみ給へ

殿上の人々志たなきをして皆わらふまど此よーいひあへりけり 無名抄 上兼昌志たなきして志きりようなづきつゝめでかんとけり

志たなめづり(宇治拾) 八 めをいからー千なめづりをして

志たなみ(素性集) 五 「松山此水のかせともおも不え恋ーき君よ志たなみぞたつ

志たん 紫檀 (源 繪合) 十六 左のたんのそこよすもうのけそく

志たむ(山家) 下 「見るもうたのうかそよゝぐるいろくづをのがらりさでも志たむもあみ

志たうち(宇治拾) 廿五 芋がゆをりて舌うちをして

志たうづ(穢 拾) 上 左大臣の土御門の左大臣の聳まなりて後志さうづのりさをとりよおこせて侍りけれ 後 (雜) いときたかけある志さうづをおとーりけるを云々

志たの帯(夫) 卅五 「志た此帯のむを氷よてをかけてそらよぞうつる弓そりの月 信友云初句下帯トアルカタ宜シサケオビトヨムベシ 太刀ノ緒也オビトリハコノ

オビナツクルモノナレバサハ云ナルベシ氷トハ太刀ノ身ヲカクシテイヘル也サゲ
オビニテ太刀ヲムスビハク由也「シロカチノメヌキノタチナサゲハキテ」云々サゲ
オビノサゲコレ也○武士ノ月ヲミルサマチカクヨミナセリトキユ四句かゝぐる
少シオダヤカナラズうつるトアルハみつるノ誤カナホ考ベシ

舌の和なる(盛衰)十八、これ不ぞ龍王を隨へ給ふ不ぞの上人を忝くも舌のやそら
りかるまゝ、口はまりせて訕申けることにあさまさよ

下の心(源をどめ)廿、かけても此人々の志たのこゝろなんしり侍らざりける(後)一
源伸「志をこりみ不よこそ出ね花を、き志たのこゝろまむをさざらめや

志こく(宇治拾)十一、そでよこへき給ひぬいりせさせ給さんとこかき聲よあ
こて、いひれれば忠恒かねての志たくよたがひて我をせよせめられかんで(同)四
三涙をかぐしこゑをたて、おめきけるよ、まといひけるものとも志たくたがひ

よけり(竹取)石づくりのみこい心の志たくあるひとよて(宇治拾)九ノ其物ハりの
ことよつりもんかのもの、其事よつりまんと志たくしおもひけるほどよ(續古事
談)二重家をまよせりへのかみよこれをなさをやとつけたるよ清輔こいりよ

と支度たがひて何となくおびえてをとりあがりたり(長門平家)十日比の法皇の御
幸もなし奉らんと志たくせられたりけれどもかくもよたらせ給そねバ(榮初花)
十よろづ志たくしおせしこゝろさしまるらせ給すともおろりならせ

志たく(拾玉)四「いそのかみふるの、小笹ふみよさ鹿こそいなけ三輪の山もと
(貫之集)「うぐひせの花ふみよたく木下いたくゆきふる春べかりけり(夫)八
俊頼
「をぐろさきあかねぬをまふみよさひもゆふぐれは蛙なかり(金槐集)上

「あさかき露よをれふす秋萩の花ふよしたき鹿ぞかくなる(古)物名「我やどの
花ふみよたくとりうさんの、かけれをやこ、まよもくる(盛衰)四十都より相ぐ
ける女房たちもこゝろこよすてられて瀆のいさよ袴ふよしたき松の木れもと

よ袖をかたきて泣ふよたり(六帖)六「夏がりの玉江のあしをふみよしたきむれる
る鳥のたつそらぞなき(源橋姫)十そこそりとなき水の流どもをふみよしたき駒の足

音もふみよどく(夫)十一「をの山や野風よ志たくかるりやのよどろよの
みもみたれちるりか(六帖)六「鶯れ志どかん中よ梅の花ちりのこらかん春のかた

みよ(丹後守爲忠家百首)正「冬くれれば群るるたづよ志たりれて○眞淵云フミヒシ
グトイフニ同(万代)春上「春駒の淺香の沼よあさりてかつそのうら葉ふみよ

たくかり(顯季卿集)「鶯の花ふみよたく山里の衣手さえぬ雪ぞふりける(拾員)上

四十六

「さや川のせせのいそみふみいたき氷よこふるさよ千きり哉(續古)冬 後京極 「霜
うづむ蒨田此木葉ふみいたきむれる雁も秋をこふら」

「あたぐる(好忠集)末ノア 一を鳥のみある、不ぞいつれなきを下ぐる」とい
るらめや人

「あたぐづれ(和泉式部集)下人よあたぐづれたるといひたるよをかたかんうたぐ
しきとひたるよ「そなたよりかたかくとも今のよまごがたかき一の松のこさ
せト(狹)四中いどこの御ものごたりどもよいたくづれたる心ち侍るといふさ
まも

「あたぐら(鞠)拾別實方朝臣みちのくまへ下り侍りけるよあたぐらつらもとて公
任

「あづまちれこのいたくらくなりゆりばみやこの月をこひざらめや(彌)新千別
陸奥よ下侍りる時前大納言公任のもとよりあたぐらつらつらとて都の月をこひざ
らめやといへりける返事よ藤原實方朝臣「ことづてん都のりさへゆく月よ木の
いたくらく今ぞまふと

「あたぐさ(後)戀一よみ「こがら一の森のあたぐさかせそやみ人のなけきのおひそ
ひまけり(源)玉葛廿。玉葛ノ腹々の何ともあるまどき御子ども皆物めりかいた

て給ふをさけばかゝるあたぐさたれもしくぞ覺なりぬる(千載)春上「うらやま
一雪の下草かたはけて誰をとふひのこかなゝるらん(同)戀三「ごが戀のあまれか
るもよみたれつゝかこく時なき浪の下草

「あたぐみ(竹取)下これを聞てかくや姫のさしこめて守り戦ふべきあたぐみをい
りともあの國の人のえ戦ぬかり弓矢していられト

「あたやまからぬ(六帖)二拾冬よの人「水鳥のあたやまらぬおもひよのあたり
此みづもこらざりけり(源)寄生五十打をけきてる直り給ふるともけよぞいたや
まからぬ

「あたまつ(蜻蛉日記)中哥云々とかきてこれ見給へざらんほどよさしおきてやがて
物しねとをしへたればさしつとて歸りたりも一見たるけしきもやとあたまされけ
んりしされとつれなくてつてもりよなりぬ(大和物)三其夜あた待けれと(同)一先
帝の御時よ右大臣の女御云々おそしまやとるとあたまち給うけるよおそしまさ
ざりけれバ哥云々(源)末つむ七かへりや出給ふとあたまちをりけり(拾)雜賀「こ
ぬ人をあたよあちつゝ久りたの月をあそれといもぬよぞなき(夫)一惠慶「きのふま
でさえし山水ぬるければ鶯のねよあたまたれぬる

四十七

忘たふ(源桐つは)八御送りの女房の車よ忘たひのり給ふ(同 帚木)四心もさこ
 ぎて忘たひきたれど(万)五五なくこなす忘たひきまして(源 總角)八十一「おくれトと
 空ゆく月をうたふかまつひますむべき此世ならねば(同 若紫)九おのがかくけふあ
 るを(同 花の宴)九こりかくい忘たひまつもさ(續後拾)戀二「ことのもよを
 てもおぞこのまるいどふをたよ忘たふ身かれを(續古)戀三「うりるべきこ
 りれをかねてうたへとやまたふりきよ鳥のなくらん(同)戀四光明峯寺入道「つ
 らからつられよなしてやみもせで下のおもひの何うたふらん(玉葉)戀四後二條
 典「つらからば忘たもトとこそおもひが我さへかざる心かりけり(新後撰)道下
 師法「人よりも忘たふ心の君もさぞのいれと答れ下よみるらん(拾愚)中「風をいた
 みかたのゝとたちうたそれ忍ぶられもあられふるかり(山家)下「かへれども
 人のなさけよ忘たもれて心の身よもそむきなりぬる(同)上「いりせりのちらそあ
 れどもおもふべき忘たしと忘たふなさけいれ花(同)上「忘けりゆく柴れ忘た草お
 られてまねくやたれをうたふかるらん(續千)春下九條「ちるもあけありぬ色
 香を身よりへてさも忘たもるゝ山さくららりな(同)戀旅「月もまうたひきまけり

これさりやどるとおもふ野べのかり庵(風雅)戀四後伏見院「忘たふりたのまむま
 つれていとひまさる人と我との中ぞとるけき(同)戀上「今のたゞ忘たふさりりの
 年のくれあもれいつまで春をまちけん(新拾)春下「をむとてくるゝ日數のとゞ
 まらば猶いりさり春をうたもん(新後拾)戀四行「今のたゞおもひたえねと月日
 さへ隔つる中を何うさふらむ(同)同今出河「おなト世は何忘たふらん有明のおも
 かけさりりさらぬこりれを(新續)戀三「身をいればこれを限のこりれぞといく
 ありつきり忘たひきぬらん(同)慶運「わりれぢをことこのころ忘たへとやかね
 ての鳥のおそろかさらん(新古)西行「おのづらいらいもぬぞいふ人やあるとやそ
 らふ程一年のくれぬる(玉葉)春下「八重よふ花をむり一の忘るべよて見ぬ世を
 うたふ忘らの故郷(新續古)戀四實勝「あそでたよとへぬる身のいつれまよけさのこ
 りれをうたひわぶらん(同)同深守「立かへりまよ忘たふべきりたぞあきう死身
 られ一のちれつらさひ(同)同道「なけきわびせめて其よをうたへとや忘れかけ
 の月よそふらん(新葉)戀三「うきよたへてうたへばこそあひみつれながるべ
 きいゆなりけり(同)同よみ人「忘たひびこりれもやらぬきぬとゞ鳥の八聲を
 かさねてぞさく(續千)戀旅「忘たひくる影いたもとやつるともおもがそり

すを改郷の月(同) 源遊院 「忘たひきてまたふみかれぬ山路も都まで見一人ぞと

もかふ(同) 戀三 道性 「忘たひとびなくのからひのこりぬちは何ととり此音をもかこ

さん(同) 同 宗行 「月たよもおもかけとめよきぬの袖のわりれをよふ涙よ

○忘たひさま(源 柳) 五心よまりせて見奉りつべく人も忘たひさまよおぼしりつ

ると一月

忘たおり(源 行幸) 卅忘たおりにともものさそやりあり

忘たおし(夫) 十二 爲相 「露そらふつこの下おし夢たえておりのねちりきうつのをま風

(同) 七 顯昭 「忘たつ山うの花おれのかりいやよどこもさえぬ雪の下おし(同) 十一 長方

「さそとりの聲ぞかおしきつゆむをいそたれをの、荻の下おし

補 忘たころも(万) 十五 卅四 「忘たへのあがしたころもういそせもてれこがせこ

たゞよあふまでよ

忘たこがれ(千載) 戀一 清輔 「かよはめのそくもたくひの忘たこがれうへにつれなきわ

が身なりけり(忠峯集) 卅(續後撰) 二 「わび人の心れうちをくらふるよふ下の山と

や忘たこがれける

忘たこひ(好忠集) 末ノ「春さ、バ氷とけなん沼水の忘た戀くもおもゆる哉

補 (万) 七十 長哥 廿三 大舟のゆくらくは思多吳非よいつりもこむと

忘たて(源 少女) 四十む月の御さうぞくなど云々いときよらよとて給へるを(同)

卅。五節舞からしとどいさとよていとようしたて、(同) わか紫 四十御帳御屏風

なごあたりくしたてさせ給ふ(狭) 四下 扇ノ事 女房の料どもおささまとよせさ

せ給ふ云々よのつねからぬさまよしたてさせ給ひて(源 盤) 卅御こもたらとよいと

お祈りるよ云々心よまりせたるやなるお祈えいさひよてまたなくしたてさせ

給ふ

忘たて顔(源 寄生) 五十何りのこととくは忘たてが不からんも中くお祈えなく

みどがむる人やあらんと

忘たぎえ(忠峯集) 卅(古) 戀二 忠峯 「かきくらしふる忘ら雪れ忘たぎえよ記えてものお

もふころよもあるりか(空穂 藏開) 十「うたことのもた忘ら雪のよさぎえてふれど

とまらぬよの中いなど

補 忘たしと(新後撰) 秋下 家敷 「立よらむもそちの陰れ道もか下柴ふりき秋の山本

補 忘たく(宇治拾) 十二。陽根をいまねりぎぬのやうよ忘たくとなりたる

ものをといふよ

忘れしうく(源 桐壺)卅内侍のすけの先帝の御時の人よりの宮よも忘れしうま
ありなれたりたれば(金葉)詞忘れし人の春日よまゐりて

忘れぬ榮衣の珠卅御びやうぶどもよのきかるからあやをもらせ給へり忘れぬし
てさるべきころをへあることをも大納言さまよまかき給へり(異本拾玉)ら

此へうしやさたこゆるまはものゝ忘れぬも猶秋のまなこそ補(思のまの日記)
御屏風の下繪色紙歌のころをへ

下咲
補忘れぬむ(万)六ノ「ありがたしひの道をあまよりい忘れぬましけん家ち
りづりば

忘れぬ下楓。琴ノ腹ノウツロ(万)七、「ことゝればなけきさだづけたりくもこと
のいたひまつまやこもれる

忘れぬひも(古)戀一よみ「おもふともこふともあはんも此かゝやゆふてもたゆくと
くる忘れぬひも(源)夕あは五「なくくもぬふのさぐゆふ下紐をいづれの世よりと

けて見るべき(伊勢物)卅七「われからで忘れぬひもとくな朝がほのゆふかけまたぬ
花よはありとも(後)戀三元方「戀しといさらよもいと下ひものどんを人へそれと

忘らなん(同)同よみ人(伊勢物)百十「忘れぬひものしるしとるもとけなくよかた

るりてどのこひぞあるべきあらずもあ○貴御説は人よこひらるゝ時ハ帯がどけ
噂をいへばもながひるかり万葉よもなひもどけとよめり補(万)十五、「うるそ

とおもひしおももむ之多婢毛爾ゆひつけもちてやませぬをせ

補忘れぬ(拾玉)二「ひとしるや忘れぬひもをどけをめて君と契をむをぶよと

忘れぬえ(古)戀一よみ「夏かればやとよふをぶるかやり火れいつまでさかえ忘れ
ぬえよせん

忘れぬたれ(源)あふひ六あどろのまこしなれたる下すたれのさまなどよしをめる

よ(同)八我もくどのりこがれたる下すたれのまをまよも補(枕)三十一、尼のくる

まをり口よりするさうのまゝうをむとのけさころもなどいみたくて忘れぬあけ
き下すたれもうをいろれをまこしとき云々(同)二忘れぬ打あけ忘れぬ引あ

けてのせ給ふ

忘れぬ(信明集)卅忘れたりといそれたる人の牛の尻またちてそりりけるを見て人々
のうれを題よて哥よまんといひければ哥云々(竹取)下心さくしきものねんトてい
むとそれさもほりさまへいきければあれもたゞりいのでこちたゞりれよりて守

りあへり(榮 衣の珠)廿おろて、がおそしけるをあらで今までこざりけるの忘れ
りけるこざりな(大鏡)三さこそ人々あやしく忘れ給へれどやんてとなきみこの云

(蜻蛉日記)上、忘れたるやうかりやかくぞある(補)榮月の宴)五十いであなしれがま

しや(榮 初花)それよこのみやたち五六人おとすするよをべて忘れかたくあしきか
祀ありなどこそい申させ給ふ(空穂 嵯峨院)三、八あかしれやおおと心かりけん人を

(土佐日記)さらのまであひりて

忘れをみ(榮 月の宴)五十。八宮ノをさなきをどのうつくしき御心からでうたてひ

がくしりくしれをみて

忘れさらひ(義經記)八あの法師これらをうたんとてこかたをまもらへ忘れさらひ
してあるいたゞことならせ

忘れがましく(源 ゆふきり)七十かうのみ忘れがましくて出らんもあやしければ

(同)六十よの中のしれがましく名をとりしりと(補)落くる)一忘れがましくとこへろ

ゆりせのたまへば

しれつ(六百番歌合)隆信 一忘れのびあまり人しれつなくききをそれつまでひ

のふといりよぞ(補)万)八十九「春比野あさるききそのつま戀はおのがあたりを

人し忘れつ、

忘れゆく(源 をどめ)二十子のおとあぶるよ親の立かそり忘れゆくこといいくさくな

らぬよそひながらかへる世よこそそべりけれなどの給ひて

忘れ(抄)無知々々ト笑タル也(枕)七、これがふみをたれがとらせしといへり(童

忘れ(源 夕霧)十かうよづぬまで忘れしきうしろやをさなきなをたぐ

ひありととおおえ侍るを(同)榎柱)六源詞卑下世よあさしれしきも又うしろや

すれも此世よたぐひありとどを(源 行幸)廿おもひよらざりけることよと忘れし

しきこへあす

忘れもの(枕)十一翁丸いづら命婦のおとゞくへと云まことりどて忘れものをも

りてかゝりたれおびえまどひて(左傳)成公十八年云無慧不弁菽麥(注)不慧也所

謂白痴也(本朝文粹)一不足言不足嘲其耻白物之入青雲(古事談)廿四 白物ヲバ可追

放云々(万)九ノ詠水江浦島子哥、老もせむ死もせむしてかた世よありける物をよ

の中の愚人のこぎもこよ告てかたらく云々(源 帯木)廿中將なまがしれもの、

物語をせんとして(同)總角)十世よさへる忘れものよて過侍ぞやとて(空穂樓)上

上^上二一のびてゐておそしてのぞりせ給へ中納言うちさらひて詞をり一の事や忘れ
ものところをみ給へつれ云々(新猿樂記)白物(源朝木)五中納言さしやりのふりもの

おそ(榮もとの車)七かゝるほど大貳の志をたび々奉り給へばのぞむ人数をら

むおそりる侍從中納言三位中將の御あつひのこゝろもとささよのぞみ給へば

ふたゝびとなくなり給ひぬ(同玉の村菊)三かゝるをぞ大貳の志をといふものお

そやけは奉りたりければとれもくとのぞみのよりけるは此中納言さされわれ

やがてありなましとおそしたちて〇おその辞書よて大貳のつりさをやめんとこふ

文を奉る也これを和訓葉は江次第を引て大貳の紫蘇と解たるのをなしたしき誤り

也(古事談)一源國盛任越前守其時藤原爲時付於女房献書云々左相府參入知其女此

忽召國盛令進辞書云々(朝野羣載)七源資通請罷太宰大貳職狀あり(榮みとてぬ夢)

卅このころ大貳三辞書奉りたれば有國をなさせ給へれば

おぞうの官人祇承官人(伊勢物)六十此男宇佐のつりひよていきけるはあるくよのしぞ

うの官人の女よてなんあるときよて(大禹)祇承于帝

おぞく(源浮舟)十句心ウキ何をりりのしぞくまりのあらんいとよくも似りよひ

たるけしひりなと思ひくらぶるよ(後)三おぞくは侍りける女の男は名さちてかゝ

る事かんある人よいひささけといひ侍りければ(大和物)六此大とくの志ぞくなり
ける人の娘の云々(空穂 國讓)中四つぎのたい藤壺の御うたのしぞくたちの御さう
ト西のらういおしなべての人のさうト云々(同 峨嵋の院)廿おそおそとのも同ト
御しぞくよてなれつりうまつる人よて云々(伊勢物)百二もとしぞくなりければよ
みてやりける

おそく紙燭落く(一)あこき御ふみをしそくさしてみれば(源夕のほ)六志そくめ
しでありつる扇御らんせれば(同)廿志そくさしてまゐれとのたまへば(和名)十二
紙燭雜題有紙燭詩紙燭俗云之曾玖(宇治拾)廿五りりいりゝありたるらんとて指燭を

さして人々見れば(狭)四あなむづりし志そくやさしましいとくらうとて(同)おと

もし給そで志そくの見えつれば

おぞく退源手習(四)さやうのものしぞくべき印つくりつ(同 帚木)卅承りながら

しぞきて(同 總角)十さし志ぞきつゝみなよりふして(同 少女)五十さし志ぞきてを

かのかけよたちかくれて(同 行幸)廿あなりしこくと志りへさまよるざりしぞき

て(同 若紫)十六おぞえかき心ちをべりめれときしらぬやうよのとてゐざり出る人

ありそしおぞきてあやしひがみよやとたたるを(土佐日記)こけどもしぞ

る事かんある人よいひささけといひ侍りければ(大和物)六此大とくの志ぞくなり

ける人の娘の云々(空穂 國讓)中四つぎのたい藤壺の御うたのしぞくたちの御さう

ト西のらういおしなべての人のさうト云々(同 峨嵋の院)廿おそおそとのも同ト

御しぞくよてなれつりうまつる人よて云々(伊勢物)百二もとしぞくなりければよ

みてやりける

おそく紙燭落く(一)あこき御ふみをしそくさしてみれば(源夕のほ)六志そくめ
しでありつる扇御らんせれば(同)廿志そくさしてまゐれとのたまへば(和名)十二
紙燭雜題有紙燭詩紙燭俗云之曾玖(宇治拾)廿五りりいりゝありたるらんとて指燭を

きよーぞきて(枕)ノ四 志りぞりせ給へかたすけなうかどいふ補(源 篝火)三きよーぞきてともしたれ補(紫日記)朝霧此絶まゝ見とふしたるの老も志ぞきぬべき心ちせるよ

志そこかふ榮もとの車三りゝるほどは傳殿いみどろかやみ給ひて云々二三日ありてうせ給ひよけり云々頼光いみどろくちをう心うきことはおゆへりさき人よ老給へりとしりながらあせ奉りて心うら我娘を志そこかひつるかけきをけり(枕)二ノ三位中將とくいへあまりうらん過て志そこかふかどの給ふよ

志そめ源 手習九 志つりきこともしめてけるりなとおもひ

志そしつ源 總角八 志い人ともい志そつとおもひて○志そんたりとおもふなり接落窪の志とく薫を心やすく一落く五○アコギナバノモトモ志ぞしつのせたるを志ぞしつといふよ五○リモノナエタル所

とてうれ一同一いりよしてかく恥かくること志つるぞ木丁こそいとうれけれどの給ふあこぎしぞして侍りしを志きてゆ

増補雅言集覽卷之五十一 終

